

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

大学間連携イベント

「『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方」

「国際協力ボランティアを知ろう」

実施報告書

2018年3月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

はじめに

お茶の水女子大学グローバル協力センターでは、紛争終結国や開発途上国における平和構築、開発、及び、人間の安全保障に関する教育・開発・実践と人材育成を目的とする「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－」事業を平成 22 年度から実施しております。本報告書は、この事業の一環として平成 29 年度に実施した大学間連携イベント『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方（平成 29 年 7 月 22 日）、「国際協力ボランティアを知ろう」（平成 30 年 2 月 5、6 日）の実施記録と参加者の報告書を取りまとめたものです。

「対話型ファシリテーション」では、NPO 法人ムラのミライ海外事業チーフの前川香子氏をお招きし、お茶の水女子大学をはじめ 4 大学 29 名の学生の参加を得て、国際協力の現場における課題発見・解決を促す実践的な手法である「対話型ファシリテーション」を参加型形式で学ぶワークショップを行いました。また、「国際協力ボランティアを知ろう」では、国際協力機構（JICA）二本松青年海外協力隊訓練所の協力を得て、開発途上国でのボランティアの経験者の講義や派遣前の訓練生との交流を通じて、ボランティア派遣の制度と実際、ボランティア活動を通じて得られるもの、協力隊後のキャリアなどについて情報を得ることができました。2 日目には、東日本大震災で被災した精神障害者の支援活動を行う NPO「コーヒータイム」を訪問し、支援の実際についてお話を伺うことができました。

「対話型ファシリテーション」で、参加者と対等な目線に立ちワークショップをリードして下さった講師の前川香子様、また、「国際協力ボランティアを知ろう」で、現場の視点でお話くださった JICA 二本松青年海外協力隊訓練所のみなさま、NPO 法人コーヒータイムのみなさまにお礼申し上げます。

また、積極的にワークショップ、視察と議論に加わってくださった参加者の皆様に感謝申し上げますとともに、これらのイベントが参加者の皆様の将来の更なる学びへつながることを祈念いたします。

2018 年 3 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター
センター長 浜野 隆

『対話型ファシリテーション』を
用いた途上国の人々との話し方」
実施報告書

目次

	ページ
1. 活動の概要	1
(1) 活動の目的	
(2) 実施日時	
(3) 実施場所	
(4) 講師	
(5) プログラム概要	
(6) 参加者	
2. 参加者報告書	5
3. 講師報告書	53
4. 資料	57

1. 活動の概要

1. 活動の概要

(1) 活動の目的：

本大学間連携イベントは、「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」事業の一環として実施するもので、国際協力の現場における課題発見・解決を促す実践的な手法である「対話型ファシリテーション」を学び、現場に存在する根本的なニーズの把握や、その結果の外部者による援助のあり方への影響といったことを疑似体験し理解することを目的とする。国際協力の場で、途上国の人々と協力者が対等な関係をつくり、当事者自身による課題発見、解決を促す実践的な手法について学ぶとともに、当事者主体の参加型開発について考える機会とする。将来的には、参加者各人の学習・研究・実践の様々な場面で応用できるようになることを目指す。

(2) 実施日時：2017年7月22日（土曜日）10:00～17:00

(3) 実施場所：お茶の水女子大学 本館 135 室

(4) 講師：特定非営利活動法人ムラのミライ 海外事業チーフ 前川 香子氏

(5) プログラム概要：

インド、ネパール、飛騨高山で地域資源を生かしたコミュニティづくりに取り組む認定NPO法人ムラのミライの前川香子氏（海外事業チーフ）による「対話型ファシリテーション」に関する講義や実践練習、グループワークなどを通じその手法を理解し、体感する参加型ワークショップ形式であった。

「対話型ファシリテーション」とはシンプルな事実質問の組み立てを通して、相手の「真のニーズ」を掘り起し、気づきと行動変化を促すコミュニケーションの手法である。冒頭、前川氏より、南アジア地域での村落開発プロジェクトを形成する上での失敗談などを交えつつ、「対話型ファシリテーション」手法が生まれる経緯ときっかけについてお話があった。それまで、村人のニーズに沿ってプロジェクト企画を立案・実施していたつもりだったが、上手くいかないこともしばしばだったとのことであった。しかし、村人の感情や考え・認識ではなく事実について問う「事実質問」を積み重ねたところ、正確なニーズの把握が可能となり、そのプロセスを分析して「対話型ファシリテーション」手法が開発されたとのことであった。

本イベントでは、事実を聞き出すための技術について、使ってはいけない疑問詞、使っても良い疑問詞に関するレクチャーや、途上国における対等な人間関係作りの重要性、対

話の切り出し方などについて詳しい説明があった。その後、実践練習①として、ペアで「事実質問」の練習が行われた。

続いて、東南アジアのとある国の山間の村での井戸掘りプロジェクトの失敗を取り上げたケースストーリーを元に、何故プロジェクトが失敗したのかを5、6人のグループに分かれて分析し、各グループでの討論の結果を発表し合い、参加者間の理解を深めた。

最後に、実践練習②として再びペア練習が行われ、「対話型ファシリテーション」手法を用いてお互いの「改めたい習慣」について会話し、その人自身が改善策に気付くように手助けする訓練を行った。

(6) 参加者：

お茶の水女子大学 学部生 20人 大学院生 2人

宇都宮大学 学部生 1人

奈良女子大学 学部生 4人

宮城学院女子大学 学部生 2人

合計 29人

(オブザーバー参加)

お茶の水女子大学グローバル協力センター 教職員 3人

原 智佐 (グローバル協力センター 副センター長)

青木 健太 (グローバル協力センター 講師)

駒田 千晶 (グローバル協力センター アカデミック・アシスタント)

2. 参加者報告書

秋山 鮎香

奈良女子大学 文学部 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

私は講義を受ける前までは「魚をあげるのではなく、魚の釣り方を教える」という考え方が発展途上国の人々の自立に繋がる最も適切な方法だと信じ込んでいた。しかしこの講義を受けて、実際は「魚の釣り方」を一方向的に教えても発展途上国の人々が自立できるとは限らないということに気付いた。すぐに「魚の釣り方」を教えるのではなく、対話の中で発展途上国の人々の側から、何をすべきか、何が必要かに気付いてもらうことが重要である。また、その対話では、質問は全て事実質問でなければならないのだが、ここでの事実という言葉の捉え方がとても印象に残った。まず、現実には「感情」、「事実」、「考え・認識」から構成される。事実質問とは、この「事実」を聞き出す質問のことである。普段の会話では、現実には「感情」の面から考えられたり、「考え・認識」の面から考えられたりするが、事実質問ではそれらは排除して「事実」に焦点を当てる。そうすることによって、相手の状況を知るために不要な思い込みを無くすことができ、事実を確認することができる。この、相手から事実を聞き出して、それによって相手も自分も“何をすべきか”、“何が必要か”に気付くという対話方法は、私にとって新鮮なものだった。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークでは実際にあった出来事を通して、講義で学んだことを活かす実践的な議論を行った。同じ講義を受けたにも関わらず、講義内容の吸収の仕方が一人一人異なっており、活発な議論を交わすことができた。そのため、講義内容の理解を深めるためにも役立った。また、1対1での事実質問の練習は想像以上に難しかったが、講義を聴くだけではわからなかった感覚を掴むことができた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

今回の講義で「魚の釣り方」を一方向的に教えただけでは発展途上国の人々はなかなか行動に移すことができず、対話を介することで彼らの自立の手助けができる、ということに気付いた。そこで、今までそれに気付くことができなかった理由の一つとして、実際に現地に行ったことがなく自分の考えや価値観のまま彼らを想像していたから、というものが挙げられる。それは私と発展途上国の人々では文化や環境が異なるため当然のことではあるが、実際に現地に行って活動を行っている講師の前川さんのお話を聞いて、私も現地で国際協力をしたいと考えるようになった。このことに気付くことができたという点でも今回の講義はとても有意義なものであった。

石山 杏子

宮城学院女子大学 学芸学部 4年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回の講義を通じて学んだことは、『対話型ファシリテーション』を用いたコミュニケーションが、いかに難しく、かついかに大事であるかということだ。

普段私たちが誰かと交わしているコミュニケーションとは全く違い、一見尋問をされているかのように感じてしまう『対話型ファシリテーション』。しかしこの方法は、途上国での現状の問題を把握するために使われ、改善策を見つける手助けをする。途上国の問題は深刻なものが多く、日本はとにかく助けてあげたい一心で援助をする。しかし、この援助の仕方を少し間違えてしまうと、あまり意味のないものになってしまうということを聞いて、援助することは本当に難しいことだと感じた。

援助というと、まず問題を見つけ出し、原因と解決方法を探っていく。この段階で、今までの援助は日本本位で考えてしまっていたがゆえに、うまくいかないことが多かったようだ。しかし『対話型ファシリテーション』を用いて事実を聞く質問をすることによって、日本本位ではなくなり、相手国の現状がよくわかるようになったという。

このようにコミュニケーションの仕方を変えることによって、物事が大きく変わるということに非常に驚きを感じた。ただコミュニケーションをとればよいということではなく、状況に応じたコミュニケーションの仕方があり、それは問題解決のときには大変重要な点であることがわかった。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークでは、ある程度は皆同じような箇所を指摘し合えたが、やはり一人ひとり考えが異なることに、改めてグループワークの難しさを感じた。しかし、グループの人の意見を聞くのは、自分にはない考え方が多かったので、聞いていて大変参考になった。

ある事例を読み、どこのどの質問が問題なのか、どこの箇所がおかしいのかということ話し合い、5~6人のグループごとに改善策を提示して発表した。おかしいと思った箇所を一つ挙げると、周りの人から次々と列挙された。事例の中で、『対話型ファシリテーション』ではタブーとされている質問がいくつかあったので見つけるのは簡単だったが、改善策を考えるのが意外と難しかった。

グループワークの前には、「why」や「how」といった疑問詞を使わない、事実質問だけをして会話をするというワークを行った。そのときは7分という持ち時間でどんどん質問しなければならなかったが、途中でどうしても「なぜ」や「どうだった」ということを聞いてしまい、会話を続けることが難しかった。『対話型ファシリテーション』を使えるようになるには、時間と慣れが必要だということ学んだ。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

今回この講義に参加して、国際協力の難しさを改めて考えさせられた。国際協力は素晴らしいことだが、日本本位で話を進めてはいけないということがわかった。これが、国際協力がうまくいかない所以だと感じた。助けたい一心で、こちらの思い込みだけで行動を起こしても、それが現地の人が望んでいることとは限らない。ここに国際協力の難しさを感じた。やはり、調査の前段階からしっかりとしたコミュニケーションをとることが一番重要だということがわかった。国際協力を行う際はいつでも、お互い初めて会う同士なので、緊張して言いたいこと・聞きたいことが聞けなくなってしまうのかもしれない。そんな時だからこそ『対話型ファシリテーション』を使い、お互いの緊張をほぐし、現状をありのままに答えてもらいたい。

国際協力をするのは、まったく簡単なことではない。しかしそのようなことに興味を持っている日本人は多いはずだ。支援したい人はまず、『対話型ファシリテーション』というものがあるということを認識したほうが良いと思った。この方法は国際協力の場面だけでなく、日常でも応用できるので、多くの人に知ってもらいたいと感じた。

井上 愛香

お茶の水女子大学 生活科学部人間生活学科 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

私がこの講義を受けた理由は、カンボジアを訪れる大学のスタディツアーの事前研修の中で、先生に参加を勧められたからであった。そのため、「へえ、対話型ファシリテーションか〜」とよくわからないまま参加を決めた。私は対話型ファシリテーションについて予備知識が何もなかったため、事前に何か調べようかとも考えたが、あえて、未知のことを知る楽しさに期待し、何も知らないまま参加した。そして、期待通り、講義は驚きと発見の連続であった。「魚をあげるのではなく、魚の捕り方を教える」という考え方は以前に聞いたことがあったが、ただそれだけでもダメだということがわかった。例えば、ヤギの育て方、ヤギの殖やし方を教えても、本人たちに本当の有意義さや必要性が芽生えていないと意味がない。支援を一時的なものではなく、何世代にもつながるものにするためには、対話によって本人たちに自分たちの頭で考えてもらい、何が必要なのか自分たちの口から発してもらうことが大切だ。それが対話型ファシリテーションによって可能になる。対話型ファシリテーションとは、相手が自分自身で原因を見つけて、改善策を見つける手助けをすることだと学んだ。普段私たちが行っている「質問」は自分が聞きたいことを次々に聞いていくことだが、「ファシリテーション」は相手の話、返答に合わせて行っていくものであり、その中で必要になっていくものは「事実質問」。この方法が講義の中で私が最も印象

に残ったものだった。何も考えずに相手の困っていることは何か、欲しているものは何か探ろうとすると、どうしても感情や考え・認識について尋ねる結果になることが多くなってしまおうと気づいた。そうではなく「事実」を尋ねること。これは非常に難しかった。しかしコツとして、「過去形」で聞くことが大切だと教えていただき、そのようにしていけば、自然と過去の事実について尋ねることができた。また、「なぜそれを始めたのか」など、きっかけを知りたいときどうすれば良いかということも大変勉強になった。その時は、まず他の選択肢があったのかを尋ねる。そしてその他の選択肢についていくつか質問をし、その時のことを思い出してもらうことが大切だということであった。事実質問は、慣れていないと難しいが、これから意識していくことにより私も使いこなせるようになりたいと感じた。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

相手に事実質問だけをして、その人をよりよく知ることは今まで経験がなかったので難しく感じたが、とてもやりがいがあった。「何」「いつ」「どこ」「誰」「数量・金額」「どうやって」「経験」「知識」これらの要素だけを尋ねて、「なぜ」「どう」は尋ねてはいけない。このルールがあったことによって、自分が今までどれだけ事実ではなく感情や考え・認識に偏った質問を相手にしてしまっていたのかに気づいた。「なぜ」と聞くと、確かに思いつきや言い訳が返答になってしまう。「どう」と聞くと、大ざっぱな質問すぎて本当に聞きたいことがわからない。本当にその通りであるなど思ったのと同時に、今まで便利で、相手の考えを聞くのにふさわしいと感じていた疑問視が、実は本音を引き出すためには適していなかったと知って、非常に驚いた。また、自分が質問をされる際には、具体的にイメージできること（例えば、昨日の食事は何でしたかなど）を聞かれることにより、答えやすさを実感した。対話を始める前は、私の悩みをメタファシリテーションだけで解決することは不可能だと正直感じていたが、繰り返し色々な質問をされ、答え、という活動を繰り返しているうちに、その悩みの原因がなんとなく自分で見つけることができた。自分で気づけなかったことも、相手に聞かれる質問の中で、自分の今までを振り返り、気づけなかった部分に触れることができたのだと思う。

またグループである NGO ワーカーの事例の問題点を探す活動の中では、きっと昨日までの自分が読んだら問題点など気づけなかったであろう会話の内容から、いくつもの問題点が発見され、非常に面白かった。しかし、問題点に気づいても、そこをどう改善すれば最も良いのかを考えるのには苦労した。その時一番自分の中でポイントに感じたことは、相手の支援をしたいというスタンスではなく、相手と一緒に問題点を探し出し、どのようにすればいいのか考えるというスタンスで対話をしていくということだった。グループでは充実した討論が行えた上に、自分の考える改善策を共有できたので、とても良い経験になった。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

今の世の中では国際協力というと、募金活動をしようとか、物資を送ってあげようとかそういった活動につながる人が多いように感じる。しかしそれでは、現地の人たちが本当に欲しているものや、現地の本当の問題点を解決することはできないだろう。ただ、写真を見たり、動画を見たりしただけで、きっと問題点はこれだろうと想像するのではなく、実際にその人たちの声を聞き、生活を知り、見えないところを探っていくことが大切だと感じた。そして、発見した問題に対し、発見して終わりではなく、本当にそれが重要な問題なのかさらに考える必要がある。そのために、今まで何か対策をしていたか尋ねる。もし重要な問題であれば、何か対策が行われたことがあるはずだからだ。そして、行ったことがあればそれに対して詳しく尋ね、行われていなければ他の村で何か行われていることなどがあるか知っているか尋ねる、といったように探っていくことが大切だとわかった。最大限の支援を目指すのではなく、最低限の支援を目指していくことが、現地の人たちの自立を助けることにもつながり、将来にもつながるのではないか。資料や文献を見て物事を考えるより、フィールドワークを通じて生の声を求めていくことが何よりも重要なことだろう。

今後の学習や研究に向けた抱負

私は9月にカンボジアで村を訪ね、インタビューを行う予定だ。その中で、今回の講義で学んだことを十分に生かしたい。私は今想像している状況と、実際行って見て目にする光景、耳にする言葉は大きく異なるだろう。短い時間しかなく、できる質問の個数も限られているが、その中でどれだけ有意義な対話を行うことができるのかが鍵になってくと思うので、次はなんの質問をするべきなのか、じっくり考えた上で、的確なやり取りを行いたい。そして、できるだけメモを取らずに相手の顔や動きに注目したい。対話していく中で、相手のことを知りたいという気持ちを強く持って、相手のことを第一に考えた上で、自分の行動が取れるようになりたい。大学一年生の夏休みにこのような貴重な機会を与えていただくことができたので、一分一秒無駄のないように、後悔のないように、カンボジアでの現地調査に臨みたい。今回学んだことは調査だけではなく、日常生活や、これから社会に出て働いていく中でも大切な知識だと感じた。聞き出し上手になれるように、対話力を磨いていきたい。

上江洲 まりの

お茶の水女子大学 文教育学部 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

途上国への支援において特に重要になるのが、現地の人々との対話である。現地の暮らしの現状を知らなければ、正しい支援とはいえない。そこで今回の講義で学んだ「対話型ファシリテーション」が活躍する。これは、途上国の人々が彼ら自身で問題を見出し、自立をはかるためのサポートとなるものである。支援する側とされる側の立場がはっきりと分かれてしまわぬよう、同じ立場に立って対話するための工夫をなされている。国際協力にあたり、最も重要な点だと思った。また、お話しいただいた NPO 法人ムラのミライの前川さんが、「自分が質問される側なら、」と考えることが重要だ、とおっしゃっていたことが印象的であった。いきなり見知らぬ人が家に来て、家族構成や収入など自分に関する様々なことを質問してくることは決して自然なことではない。そこで、簡単な質問から始め、相手の答えに関連性を持たせた次の質問を生み出す。今回の講義の中でレクチャーしていただいた、「メタファシリテーション」の方法もここで役立つであろう。これには回数を重ねることも重要だとのことだった。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークの中では、学生それぞれの視点によって違った角度からの意見が多く出た。それぞれ違う人生を歩んできた者が集まっていたこともあり、それぞれの経験を反映させた多様な意見やアイデアがみられた。そこで、自分の考えや経験を共有し、みんなで一緒に考えることの重要性を実感した。決して対話が誘導尋問的な内容になってしまわないような工夫など、客観的に見ないと気づけないような点が多くあった。また、同じ質問に対しての感じ方、解釈の仕方も人によって違うということも新しい気付きであった。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力となると、相手の役に立ちたい、助けてあげたいという気持ちが先走ってしまうことが支援の失敗の原因になるのだと感じた。相手が問題点に気づき、それをどうやって解決し、その後どう維持していくかを考え、納得するプロセスに寄り添い、相手を待つという気持ちが大事なのだと考える。支援する側の価値観だけに基づいた支援はその先のことも考えると、決して長続きするものではない。現地の暮らしに寄り添い、理解したうえで一緒に問題点を見つけ出し、それが彼らにとってどんな影響を及ぼしているのかを審らかにすることが大事なのである。持続可能な開発はその開発の段階でも時間のかかるものである。準備、設計、開発のプロセスにおいても現地の人とともに作業することや、対話的ファシリテーションを活用しながら支援を進めていくべきなのではないか。

大川 紗羅

奈良女子大学 文学部 2年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

講義を通じて学んだことは、ファシリテーションを使った会話の重要性である。ファシリテーションを使って対話をするのは実際難しかったが、会話の中からその人の日常を想像できたり、特徴を掴めたりした。これまでは話しているだけでその人の特徴などは把握できると思っていたが、ファシリテーションを用いた会話の方が効率よく具体的に聞き出すことができると分かった。時々、このことを意識しながら友人と会話したいと思う。

また、講義を通じて印象に残っていることは、前川さんから朝ごはんに関して質問をされたことである。質問内容は、朝ごはんは何を食べるのが好きか、普段朝ご飯に何を食べているか、今朝何を食べたか、である。3つの簡単な質問に答えただけなのに、自分も知らなかった特徴が見えてきて驚いた。私の場合、朝ごはんにはご飯を食べたいと思っているが、普段はメロンパンを食べ、その日はご飯を食べていた。そして、普段食べていたと思っていたメロンパンも毎日食べていなかったことが分かり、自分の感情と認識と事実の差に初めて気がついた。問題を解決する際には、事実から解決策を考えるように心がけたい。

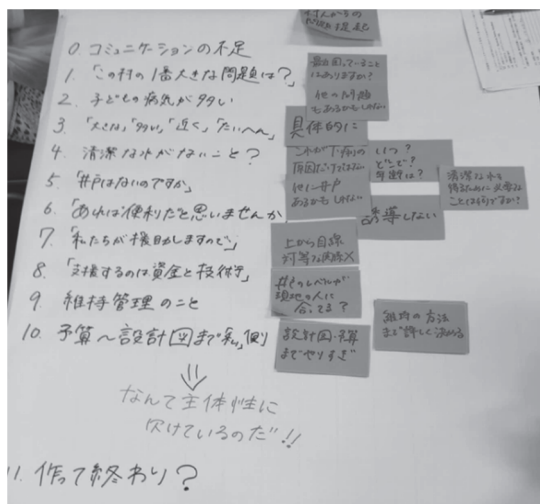
グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

討論を通じて感じたことは、メタファシリテーションによって問題解決の道が明確になるということである。また、問題として捉えていたものが自分自身にとって本当に問題なのかを見極めることができた。そして、それが本当に問題であった場合、何が原因であったのかを考えることもできた。例えば、私は休日に大学で課題をしようと思っても家でだらけてしまうことが多く、それを問題であると考えていた。しかし、ペアの人と討論をしているうちに、自分が思っていたよりも学校で課題をしている日が多く、それほど問題ではなかったことが分かった。この体験を通して、自分自身のことを勘違いしていることが多くあると実感した。勘違いしたまま問題解決を行おうとすると根本的な解決につながらないので、メタファシリテーションを使った対話によって問題を解決することが重要であると感じた。

グループワークを通じて印象に残っていることは、あるメンバーの意見である。その意見は写真（次ページ）の10番にも書かれているが、「井戸を作るには、その予算や設計図まで現地の人々と考えるべきではないか？ そうしないと、壊れたときに村人たちで修理できず、結局井戸の放置につながる。」というものであった。私には考えつかなかったことだったので、そういう過程まで一緒に考えることも必要だと感じ、共感した。今後、途上国の人々を支援する立場になった場合、心がけることのひとつにしたいと思う。

また、グループワークの題材となった村人と支援者の対話を細かく見ていくと多くの問題点が見つかり、とても勉強になった。そして、それら問題点がすべてメタファシリテ

ションによって明らかになったことが興味深かった。写真に0~10までの村人と支援者の会話の問題点が記されている。それに対して、班のメンバーが緑色の付箋に問題点の理由を記している。緑の付箋に講義で学んだことがすべて活かされている。「大きな」や「大変」などの抽象的な表現が多かったり、上から目線で発言していたりしている部分である。メタファシリテーションを知らなければ、この会話の流れにここまで多くの問題点があることに気づくことはできなかった。



(写真) グループワークで使用した発表用紙

国際協力や地域開発活動について考えたこと

以前から国際協力に興味があり、将来はそのような職業に就きたいと考えている。しかし、現地の人々とどのように話せばよいのか分からず、それを知りたいとずっと思っていたので良い経験になった。実際に支援するときには心がけたいことも多く見つかった。今回はその中から特に気をつけたいことを2つあげる。

一つ目は、現地の人々から本音を聞き出すために対等な関係を築き、対話をするのである。対等な関係を築くために前川さんが実際にされたことにも驚いた。村の人々が講習会の日を忘れ、参加したいと言っていた人々が集まらなかったためその日は帰り、村の人々が講習会の予定を考え直すまで前川さんからは何も言わなかった例である。これも支援する側と支援される側が対等でなかったからであると気がついた。また、支援する人と支援してもらう人では上下関係が生まれてしまうので、まずは身近なことから話し始めて相手から本音を聞き出せる状態にしたいと思う。

二つ目は、メタファシリテーションを用いた対話をするのである。私は「なぜ」や「どう」を含む会話を日ごろからしがちであるが、「何」、「いつ」、「どこ」などを用いるように心がけ、現地の人々の問題を根本的な解決につなげられるようにしたい。そして、支援者が答えを導き出さないことも同時に気をつけたい。類似経験をしたことがある人はいないか、ということを手元に質問し、自分で解決策を気づくことができるようにサポートしていきたい。

長村 瑠納

お茶の水女子大学 文教育学部言語文化学科 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

私が考える「支援」の体制が、ムラのミライが1990年代に実践していた理念「魚をあげるのではなく魚の捕り方を教える」に似ている部分もあり、それが否定されたのが新鮮だった。村の人自身が、解決策を見いださないと本質的な解決にならないとムラのミライは考えている。「支援」とは、支援者側と一緒に改善策を考えるものだと考えていたので、その考えは興味深かった。言い方は悪いが、支援者側が提示した支援は実践されないことが多いそうだ。私は、支援を終えた後、それが長期的に、持続的に実践されているのかといった広い視点をもっていなかった。また、支援者はデータをとるために、平気で村の人に年収や暮らしぶりを聞く。その質問は、自分が聞かれたら躊躇するものであるはずなのに、なぜ私たちは見ず知らずの村の人に尋ねるのかというお話も印象に残った。改めて、「対話」の難しさを感じた。

ムラのミライが、支援者と支援を受ける者が「対等」である支援を行うために「対話型ファシリテーション」を実践したことは、興味深い。現実を構成する3つの要素は、「感情」「考え」「事実」であると初めて知った。ワークでは、朝食に何を食べたのかを例にした。普段朝ご飯で食べるものと、今日の朝実際に食べたものは異なる場合が多い。そのワークを例にして考えると、確かに私たちは事実（今日の朝ご飯）と考え（普段の朝ご飯）を混同しているなど感じた。私自身も、「事実」を聞かれているのに「考え」をのべていることが多いように感じる。支援者が事実を聞いていると思いついで、考えを聞いていたら、支援の内容も変わる。

前川さんは、日本人が村にやってくると村の人は何かをもらえらると思ひ、困っていることを誇張するとおっしゃった。そのように村の人を批判的な視点で考えたことがなかった。また、私たちの固定観念と村の人の固定観念は異なる。「多い」「少ない」と感じる量も異なる。その差が、大きな誤解を生むこともある。これを避けるために、対話型ファシリテーションでは、使って良い疑問詞と駄目な疑問詞を分けていた。「事実質問」をするために、why, howなどの抽象的な疑問詞は使ってはいけないそうだ。この事実質問を行うという取り組みは、素人がいきなり実践するのは難しいと考える。前川さんがお話してくれたように、実践の練習を重ね、できるようになりたい。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

だめな NGO ワーカーを例に、グループワークをした。その NGO ワーカーは、支援内容を誘導尋問のように勝手に決め、村の人々が自分で解決策を発見していなかった。間違っていることを見つけるのは比較的容易であったが、その台詞を事実質問に置き換えるの

はむずかしかった。注意をしないと、Why（なぜ）の疑問詞を使用してしまう。そのワークは「子供がよく病気になる」といった内容であった。講義前には疑問にも感じなかっただろう「子供」が何歳ぐらいを指すのか、病気になる頻度はどれくらいかといったことに着目することができたので、講義の成果は出たのではないかと思う。他の班の発表で、その村に困っていることがあると決めつけるのもどうなのか、と話していてなるほどと感じた。グループワークでは、かなり時間をかけて問題に取り組めたが、実際の現場では会話の中で「対話型ファシリテーション」を行うので、改めて難しいと実感した。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

「対話型ファシリテーション」を用いて、現地の人へインタビューなどをしないと、話を聞く人によって支援の内容が変わってしまうという危険性を感じた。少数で行う国際協力や地域研究活動ならば、そのずれは少ないにしろ、大人数で行った場合は大きなずれになってしまう。私は数字上のデータを安心して利用しているが、そのデータも紙面上ではわからないが、そのようなずれを含んでいるのではないかと疑問に考えた。国際協力や地域研究をしている団体は、昨今増えている。それは良いことに思うが、それら全ての団体が正しく支援をしているのが不安だ。そのような団体がとったデータを日本にいる私たちが何も知らず利用している。データ上のずれをなくすためにも、ムラのミライが提唱する「対話型ファシリテーション」といった知識を、全ての支援者が持つべきだと考える。支援者側も現地に赴けば、支援者側のみといった小さなコミュニティでしか活動していない。考えや知識が偏らないように、他の団体との交流や研修をするといった取り組みをするのはどうなのかと考えた。知らないうちにワークで取り上げたような駄目な NGO ワーカーに陥ってしまうこともあるだろう。自分に注意する人は現地でいない場合が多い。（支援者側の無意識的な優位性）この支援体制は、再考すべきだろう。

小野崎 すみれ

お茶の水女子大学 文教育学部 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

途上国の村の支援に必要なことは物資や設備の提供ではなく、食糧の獲得方法や設備の使用、管理法を教育すること、つまり村の人たちの「自立」を助けることだという前川さんのお話が印象に残った。以前までは途上国の支援について、その土地に必要なもの、不足しているものを提供することであると考えていたが、支援がなくても村人たちが彼らの力でよりよい環境を築くことができるように、その方法を教えることが最も大切なのだと気づかされた。村の人たちの自立を助けるために重要となるのが、今回の講義のテーマで

ある「対話型ファシリテーション」であるという。ここでの“ファシリテーション”の意味は、村の人たち自身が問題を発見し解決法を考えるということであるようだ。対話型ファシリテーションにおいて行われる事実質問についてお話を伺い実際に練習もしたことによって、感情や考え、認識と事実の間の違いを初めて認識することができた。なぜ？やどう？という問いに対する答えには話し手の主観が含まれてしまうために事実とは言えず、事実を話してもらうことの難しさがわかった。また、聞き手の質問の仕方にも工夫が必要であるということも学んだ。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

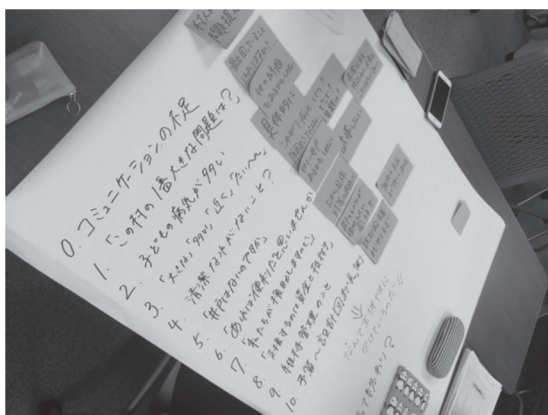
井戸の事例に対してのグループワークを通じて、対話型ファシリテーションにおいて村の人たちとのコミュニケーションが非常に大切であると感じた。井戸の事例では、質問する側が村に問題があるということや、清潔な水を得るためには井戸が必要だということを決めつけてしまったことにより、村の正確な情報を得ることに失敗していた。村に問題があるということを支援する側が勝手に前提として話を進めるのではなく、住民たちとの会話の中で住民たち自身と一緒に問題を発見し、解決法を探していく必要があるのだと考えさせられた。また話し合いを通じて、事実を聞き出すために具体的にどう質問すればいいのかを考えることの難しさを痛感した。事例の中では、例えば「子どもたちが下痢になるのはなぜですか？」という質問があるが、「清潔な飲み水がないからだ」という村人の答えはあくまでその村人の考えでしかないという意見がグループで挙がった。子どもたちの下痢の正確な原因を知るためには、いつ？どこで？子どもの年齢は？といった具体的な質問がさらに必要であるというグループの結論に至り、対話型ファシリテーションには時間と粘り強さが求められると感じた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力や地域開発活動において、上の内容と重複するが、相手の人との良好な関係性を築くことが最も大切であると考えた。以前は途上国に暮らし支援を受ける側の人たちのことを、お願いしたことや教えたことはなんでもその通りにやる人たちだと思い込んでいた。しかし、前川さんの講義で時間を守らなかった村人たちや設備の管理を行わなかった村人たちの事例を伺い、途上国の人々を従順な存在だと勝手に考えていた自分の誤りに気付いた。支援をするから言われたとおりにしろというという関わり方は支援する側とされる側の上下の関係であり互いの信頼が伴っていない。村の人たちに自立してもらうためには、村の人たちと一緒に問題について考える中で対等で信頼しあえる関係を築き、的確な行動を促すことが必要なのである。

今後の学習や研究に向けた抱負

今回学んだ「対話型ファシリテーション」の知識を活かして、カンボジア現地調査でのインタビューで自分の知りたい情報を得ることができるよう準備していきたい。現地について事前に学ぶことは非常に重要だと考えるが、先入観を持って現地を見ようとするのではなく、調べただけではわからない地域の姿を発見するつもりで現地調査に臨みたい。



(グループワークで意見をまとめた模造紙)

木下 満里奈

お茶の水女子大学 文教育学部人文科学科 2年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

私がこの研修で学んだなかで特に目から鱗だったのは、事実質問という質問形態だ。最初に紹介された1990年代の『ソムニード』における目標、「魚をあげるのではなく、魚の捕り方を教える」というのは、これまでニュースや授業等で得た知識から考えて、発展途上国を支援するうえでふさわしいものであるように思えた。物資の支援という一時的な援助に留まらず、長期的な目線で現地の人々の自立を促すというのはまさに理想的な援助方法だと考えていたのだ。しかし、前川さんが指摘しておられたのはそれ以前の問題、つまり「自分たちで課題を見つける」さらに「自分たちでその解決策を見つける」ということだったのだ。『ソムニード』から名称を変更した『ムラのミライ』では、この手助けをすることをファシリテーションと呼んでいるとのことである。そしてその際に使われるのが、事実質問というわけである。この事実質問のポイントは、過去に起こったことであり変えられないこと、また誰からも確認が取れることを聞くということである。事実とは何かという問いを出された際自分でも思案してみたが、なかなか明確に定義できないと苦戦した。しかしこの2点を教えていただいた時、なるほど事実とはこういうものかととても納得できた。前川さんがこのことを説明するために出された感情、考え（認識）、事実の3つの質

間も、ファシリテーションに事実質問を加えたメタファシリテーションという方法を自分の中に定着させるのに一役買った。さて、事実質問の際に使える疑問詞が「何・いつ・どこ・誰」等であり、「なぜ・どう」等は使ってはいけないというのは分かった。だが、いざ隣の方と練習してみるとこれが存外難しいのである。まず、うっかりと使ってはいけない疑問詞を使ってしまいそうになる。そこで、正しい疑問詞を使おうとするも何点か尋ねてしまうと、関連ある質問をするのが困難になるのである。実践に移す前にこの難しさを知ることができたことも一つの収穫であるし、さらにこのメタファシリテーションは発展途上国での調査だけではなく日常の相談などにも応用できるというのは、一石二鳥になることを学べた。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

ファシリテーションを考えるための、発展途上国での井戸の建設を例にとったグループワークは、他大学の方から他学年の方まで様々な立場の方の意見を聞くことができる場であった。全員同じく前川さんの話を聞いているにも関わらず、指摘する観点が異なったり同じ観点でも踏み込む深さが異なったりするのは興味深いと感じた。また、他人が指摘しなかった点について言及できるのは楽しくもあった。さらに自分でも驚いたのだが、普段は他人の意見に賛成することこそあれ否定するということはあまりないため、「それはこっちではないか」といったことを発言できたのは貴重な体験であった。しかしまだまだ遠慮してしまう場面も見られたように思うので、相手の意見を尊重したうえで意見を述べる練習はいろいろなところで行っていききたい。また模造紙に書いた文章を説明する時にも、先輩の発表の仕方はどれが伝えるべきことか、そして各話のつなぎ方などがすっきりしていて参考にしたいと思った。私はつい焦って支離滅裂になりがちなので、このような機会を利用して改善していく必要があると実感した。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

スタディツアーの事前学習の際に、先生から発展途上国の人々に「本当に必要とされているものは何か」を知ることの大切さを伺っていたのだが、それを解明するために必要なのが前述したメタファシリテーションであるということを知り、また一歩国際協力の理解につながった。テレビ番組などで見る支援活動やボランティア活動は、メタファシリテーションを活用できていないのではないかとこの疑念が強まったので、その界限にも『ムラのみらい』がとっているような方法が広まってほしいと思う。たとえ視聴者の存在を意識したバラエティ色が強いものであったとしても、せつかくお金や人材を動かし現地の人々の時間もいただいているわけであるから、やるからには的確な手段をとってもらいたい。そして、そのほかのNPO法人のような団体の中にももしかすると、まだメタファシリテーションという概念がない団体が存在しているかもしれないので、そちらにも浸透すること

を願う。さらに私はこの講習に応募する際、「相手が発展途上国の人だということを意識しすぎずに話を伺いたい一方で、自分の関心において学習する姿勢も忘れずに接していきたい」と述べ、そのさじ加減が知りたいと記述した。前川さんからは、相手がこちらの満足する答えを言っているかもしれないことを頭に入れておき、「日本から来た＝何か支援をしてくれる」という期待を崩したところから始めるというスタンスでの挑み方を教わることができた。これは9月のスタディツアーで役に立つものであり、またこれから先、仕事として国際協力や地域開発に携わる時になっても覚えておきたいことである。今回の講習で貴重な話を伺った身として、自分でも国際協力のあり方に影響を与えられるようになればと思う。

今後の学習や研究に向けた抱負

これまでそれぞれのところでも少しずつ触れてきたように、直近で今回の講習の内容を役立てたいのはやはりスタディツアーである。まずは、現地のインタビューで用いる質問を考えるうえで事実質問の考えは即戦力になる。おそらく前川さんの話を聞く前の自分であつたら、使ってもいい疑問詞と使ってはいけない疑問詞も意識することなく質問を考えていたことだろう。それでは、調査の結果もまったく見当違いなものになる恐れもあつたため、この話を聞いたのはまったく幸いであつた。ここからは自分で工夫していかなければならないのだが、「なぜ・どう」といった側面の話を聞き出す場合に事実質問を使ってどのように追求していくべきかを考えたい。そして、現地の人々といざ関わる際には本講演で学んだ関係づくりの方法、対話の始め方を念頭に置いて接していこうと思う。さらには、私は歴史専攻であるから、これから大学の研究において過去の文献に目を通す機会も多くなるだろう。そこから事実だけを抽出するためには、事実質問がとても役に立つと感じた。本公演は様々な場面で応用することができるスキルを学べた、非常に有意義な時間となった。もちろん一朝一夕で身につくものではないだろうから、積極的に機会を見つけて自分のものにしていければと思う。前川さん、大変貴重なお話をありがとうございました。

久保田 奈津

奈良女子大学 人文社会科学・地域環境学コース 4年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

私が今回の講義を通じて学んだことは「役に立つ支援」のあり方に対するひとつの明確な答えと、その方法論と習得の仕方です。ムラのミライの前身であるソムニードでは「魚をあげるのではなく、魚の釣り方を教える」ことが必要であると考え、1度だけの物資ではなく技術や能力、収入の向上などの支援をすべきだという理念のもと活動を行っていま

した。現在のムラのミライのHPでは団体の活動の目的を「コミュニティと経済と環境が調和した状態の人間の営みの実現するために、地域コミュニティが資源を維持、活用、循環させる仕組みや暮らし方を創り出す、その方法論を生活の場での活動を通じて構築し、それを担い実現する人材の育成すること」としています。これがムラのミライにおける「役に立つ支援」の定義です。私がここで印象に残ったのは持続可能な仕組みや暮らし方を創造する方法論を生活の場での活動を通じて構築するという部分です。コミュニティ自らが課題を発見し解決するための支援を行うためには、支援者がコミュニティの現状や背景を正確に理解することなしには不可能だと今回の講義を聞いていても、私の経験からも実感しました。

ムラのミライではその支援を「メタファシリテーション」という方法を使って行っています。メタファシリテーションではコミュニティの事実・回答者ホンネを引き出すために「事実質問」で対話を構成します。人が知覚する現実には感情、考えや認識、事実で構成されています。この事実質問というのはそのうちの事実のみを問う手法です。何、いつ、どこ、誰、どうやって、～したことがありますか？～を知っていますか？などの疑問詞のみを使用して質問を組み立てます。このような方法論のみならず、回答者との対等な関係を築くために、興味を持って相手の話を聞くこと、相手の答えを基に次の質問を考えることなどのコツも勉強しました。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークでは実際の国際協力の場面のスクリプトを見て、どこに問題があるかを考えました。どこにでもよくあるようなスクリプトでしたが、すでに講義を受けた上で質問を見返すと多くの問題を見ました。意識していないと気づかないくらい、会話の中に話者の「考え」が入ってしまうような言葉（例えば一番大きな問題、近く、きれいな、など）が使用されており、それが私自身にも言えることをそのあとの1対1のワークで実感しました。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

私は大学で発展途上国の農村の暮らしなどについての授業を取り、学外ではガーナの孤児院へ「自立支援」を行う学生団体で活動しています。授業でラオスの農村において相互依存や生業複合による自給自足の生活スタイルが、市場経済の導入や近代化に伴う都市化によってその複雑な仕組みが急速に変化していることを学びました。またガーナの孤児院へは自立支援という理念の下活動を行っているものの、結局は金銭的な支援に終始してしまい、支援対象者の自立をうたっている中でどこまで介入・提言すべきなのか、明確な答えが出せないままに活動を続けています。結果として、このセミナーを受ける以前は外部の人間が、支援先のコミュニティのシステムが外的・内的な要因によってどのように変

化しているのか、また孤児院も単体で見るのではなく、空間的・時間的に大きなスケールの中でどのような位置づけにあるのか、を知らないままに支援を行うことに対して漠然とした無意味さや危険性を感じていました。今回の講義を終えて、講演者の方ともお話をさせていただき、自分が行っている活動の理念や根本的な部分について改めて見直す必要性を強く感じました。支援を行っていることに満足せず、ミクロ・マクロ両方の視点を持って活動を続けていきたいです。また、メタファシリテーションの技術は国際協力の現場のみならず日常生活の至る場面で練習・応用することができます。すでに講義を受けてから2週間が経ちますが、なんで？と聞きたかったところで、いつ？誰と？と聞くことで、より具体的な「事実」の回答をすでに得ることができています。

小山 遥花

お茶の水女子大学 生活科学部人間生活学科 2年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回の大学間連携イベントでは、認定 NPO 法人ムラのミライ・海外事業チーフである前川香子氏から、国際協力の現場における課題発見・解決を促す実践的な方法である「対話型ファシリテーション」について学んだ。イベント前半の講義では、まず前川氏がインドで経験した失敗談とその理由、次にメタファシリテーションについて学ぶことができた。前川氏はムラのミライに所属し、インドに派遣された後、現地で植林や井戸作りなどの支援によりインドの人々の自立を促す活動を行ったが、失敗に終わったという。ムラの人々は、ムラのミライの支援を受けたいとはいうが、植林のための木はすぐに枯らしてしまったり、井戸作りの時もレクチャーの場に人が集まらなかったり、うまくいかないことが多かったという。支援活動がうまくいかなかった理由は、ムラの人々が問題なのではなく、支援をする人がムラの人々の「本音」をうまく引き出せていなかったことであるようだ。そのようなインドでの経験が、メタファシリテーションの素となっている。現地の人々の本音を引き出すには、思い込み質問を避けて事実質問をすることが大切である。私たちは、人に質問をするとき「感情」「事実」「考え・認識」の3つの要素のうちいずれかを尋ねようとする。このとき、感情や考え・認識についての質問をすると、その答えはその人の性格や育った環境や文化によって大きく変わる。よって相手の現実や本音を引き出したいときは、感情や考え・認識についてではなく事実についての「事実質問」をする必要があるということだ。具体的に言うと、事実質問では、「何」「いつ」「どこ」「誰」などの疑問詞は使って良く、「なぜ」「どう」などの疑問詞は使ってはいけない。この事実質問だけを使って対話をし、かつ相手に興味を持って対話することで上手く相手の本音を聞き出せるのだという。以上が、私が今回の講義で学んだ事である。今回の講義を受ける前はファシリテーションという言葉すらも知らなかった為、前川氏から教わった全ての事が新鮮で印象に残ったが、その中でも前川氏の語るインドでの実体験や、事実質問を使った練習などは現実

的、実践的でとりわけ印象に残った。また、今まで支援活動が上手いかわからないのは知識の伝達不足や時間不足のせいであると考えていたが、それ以前に NPO 側が支援される学科のニーズを上手く聞き出せておらず、ひとりよがりの支援になっていたのだということも学び、非常に衝撃をうけた。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークでは、はじめにある NPO のインドでの井戸作り事業の失敗談を読み、NPO の人の質問で問題がある部分を探して事実質問に変換するワークを行い、次に 2 人ペアになって、お互いの悩みを打ち明け事実質問によって本人から問題の解決策を引き出すというワークを行った。グループワークで用いた事例では、綺麗な水を手に入れる方法として NPO 側から井戸を提案していたり、井戸を作る方向に誘導する質問をしてしまっていた。しかし自分たちの意見ではなく、インドのムラの人々から意見を聞き出すのに「どうして」や「何故」という言葉を使うことが出来ないという点が凄く難しく、質問を変換するのに苦労した。次に行ったペアワークでは、まず私が相談を受ける役になった。前のグループワークではじっくり事実質問を考える時間があったが、ペアワークではその場ですぐに質問を考えなくてはいけない為、グループワークの時よりも格段に難しく感じた。また、グループワークの時と同じく、「どうすれば解決できると思いますか？」というのは事実質問ではないので使ってはいけず、うまく相手から解決方法を引き出すのが難しかった。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

今回イベントに参加して、国際協力のより良いあり方や NPO 団体が果たすべき役割について考えた。まず国際協力をする際にはより地域の人々と同じ目線でその地域の問題を考えなくてはならない。今回の講義で習ったように上から目線であったり支援する側が現地で聞き取り調査をする前から問題点とその解決方法を決め付けてしまっていたりすると、地域の人々の本音を引き出せず支援をしたとしてもその後続かない場合が多い。よって国際協力を行う際には長い時間をかけて地域の人々になじみ、本当に必要な支援が何か、その支援は続ける事ができるのかを地域の人々の目線で考える必要があると考えた。また、そのように地域の人々の目線でその地域のニーズをくみ取るには、NPO 団体の力が必要である。国際協力を行う NGO 団体はその地域で何年も活動を行った経験があり、その地域に関する細かな知識や技術、地域の人々とのつながりを持っている。今回習った、対話型ファシリテーションもそのような、NGO 団体が長年の経験の中で生み出した技術である。そのような知識や技術、地域の人々とのつながりなどによって細やかな支援を行う事が、NGO 団体が国際協力を行う際の意義であるのだ。

桜井 亜実

お茶の水女子大学 文教育学部言語文化学科 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

開発途上国の援助について、一見するととても効果的な援助に見えるものが失敗に終わってしまっている事例が多くありとても驚いた。特に援助を受ける側の人々が援助をする側の人が言ってほしい、ぜひ援助したいと思っているような内容を察して意見要望を言うことも多いと言うことにも衝撃を受けた。そういった事実から、自分たちが何をしたいかではなく、開発途上国の人々が何を望んでいるのかの本心を聞き出すことや、そのための方法、信頼関係が大切なのだと感じた。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

今回の講義の中で“事実質問をする”ことを特に意識してペアワークやグループ討論を行なったが、この“事実質問をする”というのは私にとって想像以上に難しいと感じられるものだった。ペアのグループワークでは、インタビューをする際に、いきなり本題に入っていくのではなく、まず身近な、話しやすい内容から入り、事実質問を繰り返し行うことで自分が聞き出したい内容に結びつけていくという方法を実践した。なぜ(why)やどのように(how)を使わないように質問を続けていくと、どうしても自分が聞き出したい内容の方向がわからなくなり、話のもっていき方が上手くいかなくなってしまい、戸惑うことが多々あった。まだまだ至らなかったが、カンボジアでの調査、インタビューでも必ず役立つスキルであると思うので今後も練習を続けていきたい。また、グループでの討論では、一つのインタビュー調査から支援した事例について問題点やその解決策について話し合い、グループごとに発表した。その事例と意見共有から支援する側が一方向的に援助するだけでなく、現地の人々に主体的に取り組んでもらうことが大切だと強く感じた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

私はこれまでも格差是正はもちろん、単に困っている人一人ひとりが少しでもより良い生活をしていけるように、国際協力や地域開発活動はとても重要で意味あるものだと感じていた。しかし、上記のように、それがうまくいかない場合も多くあり、ただ単に外から見ただけで判断するのではなく、その支援方法やまず現地での人々の意見の聞き方までそれが適切であるのか、自分たちの一方向的なものになっていないか、現地の人々が本当に必要としていて、その後も維持していけるものなのかを注意深く考えて実行する必要があるのだと思った。

今後の学習や研究に向けた抱負

まずは今回学んだ内容、考えたことを9月に予定しているカンボジアでの調査で生かしていきたいと思う。特に農村でのインタビューは今回学んだことを生かせる機会なのではないかと思っている。私は教育に関する質問をしたいと考えているが、事実質問を使いながら、自分が望んでいる答えや一方的な考えを押し付けるのではなく、相手と真摯に向き合い、相手が本当に思っていること、感じていることを聞いて、現地でしか聞けない生の声を直接聞きたいと思っている。そしてカンボジアの教育における格差や教師の問題、教育に求められていることは何かということについて、理解、考えを深めていけたらと思っている。また、カンボジアでの調査以外にもこれから国際協力や地域開発活動について考えていく上で、今回学んだ内容を生かし、その問題・課題を見つめ直し考えていきたいと思う。

佐々木 綾音

お茶の水女子大学 文教育学部 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

私は今回の講義で、初めて「ムラのミライ」のような海外支援団体について詳しく知ることができた。このような団体があることはもちろん知っていたが、実態については知らないことばかりだったので、詳しく知るとても良い機会であった。まず、「ムラのミライ」では、ただお金を渡したりただ何かを作ったりということではなく、村の人々が自立するために、そしてその生活を持続していくためにはどうすればいいかを考えていると分かった。そして、私がこれまで思っていたよりももっと、支援というのは難しいことなのだと分かった。私たちの中の常識で考えて、うまくいくのではないかと思っていることも、支援する土地の考え方や常識に当てはめてみるとむずかしいこともあるというのは、実際に話を聞かなくては気づけなかった。特に印象に残ったのは、頼まれて、時間と場所を決めてそこへ行ったのに、相手方は誰も来ていなかったという話だ。そんなことは日本では絶対のないことだ。しかしその土地ではそれが普通のことだったのである。今回、このような生活や考え方の違う人々を援助するにはいろいろと困難なことがあるということが分かって良かった。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

実際のフィールドワークの際にも使われる手法を用いてグループワークをしたのは良い経験になった。相手との会話の中で自分の欲しい情報を得られるように話を運ぶというのは思ったよりもとても難しかった。一問一答のような形式でどんどん質問を重ねると、聞

きたいことは聞き出せるかもしれないが、やはり質問攻めのように圧迫感があった。これをもっと会話の中の自然な流れでできるようにしなければならないと思った。また、事実質問という方法は私のなかではとても新鮮だった。援助となると、何に困っているのか、どうして欲しいのかということを知りたい。しかしそれを聞いてしまうと相手方の主観が入り、本当に援助が必要なのはどこなのかが分からないというのは盲点だった。だからこそ、事実質問で現状を聞いてその上で本当に必要なことを見極めるというのも大切なことだと分かった。しかし、実際にやってみるとどうしても HOW や WHY といった疑問詞を使いたくなってしまう。これもまた難しく、実際の現場で使えるようにするためには練習や実践を繰り返して慣れることが大切だと分かった。また、普段から事実質問とそうではない質問を見極めるようにしたいと思った。また、悩みを話し対話のなかで解決策に気付かせるというのも面白かった。解決策を提示するのは簡単なことだが、相手が自分で気付けるように会話を運ぶのは難しいことだった。実際にやってみて、これにも練習が必要だと実感した。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

今回の講演に参加して、国際協力や地域開発活動は遠く離れたところからするよりも、現地に赴いてその土地の人と実際に話す方が絶対にいいと強く思った。遠くから話を聞くだけでは実情は把握できないだろうし、実際に自分の目で見なければ分からないこともあると思う。相手と同じ文脈に立って、同じ目線で、同じ解決策に向かって尽力するということが大切なのだと考えることができた。

今後の学習や研究に向けた抱負

私はつい先日、初めて海外に行ったばかりだ。初めての外国は驚きがたくさんあったし、やはり日本とは文化や考え方が違うと思ったことも多くあった。しかし、その土地で生活している人はたくさんいて、私たちの生き方が必ずしも正しいとは限らない。国際共生社会論実習では、今回学んだことや対話型ファシリテーションを利用して、少しでも現地の実態を知れたらと思う。そして私の今後の人生でも、今回学んだことを生かしていきたいと思った。

島 百子

お茶の水女子大学 理学部 3年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回の講義で「事実質問」について初めて知った。大変分かりやすかった例が、前川さ

んがした朝食に関する質問だ。数名の参加者に「何を食べるのが好きか」、「普段なにを食べるか」、「今朝なにを食べたか」と3つの言い方で尋ねると、すべての回答が一致する人はいなかった。むしろ3つとも異なる人がほとんどだった。ここで登場したのが、現実には感情、考え・認識、事実の3つで構成されているという話だ。先ほどの質問への回答はまさに、この3要素の存在を明確に表している。そして、回答者にとっての現実には質問のされ方によって全く異なることが理解できた。では、相手の事実を知るにはどうすればよいだろうか。そのための方法こそが事実質問だ。最も驚いたのは、事実質問では「Why」と「How」の疑問詞を使わないという点である。実際に事実質問を練習してみたのだが、日常会話で当然のように使っているこの2つを避けて質問するにはかなり苦労した。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

東南アジアのとある村人との会話から問題点を挙げるグループワークを行った。「この村の一番の問題は何ですか」という質問から会話が始まるのだが、この一言目から問題視する声があがった。村が何かしらの問題を抱えている前提で話を進めているというのである。確かに、いきなり訪れた土地で村に問題があるか、もしくは村人が問題として捉えるような事案があるかわからないはずだ。途上国の村を助けたいという質問者側の希望によって、「きっと困っていることがあるはずだ」と決めつけてしまっていることに気付くことができた。グループ全体から非常に多くの指摘と解決策の提案があったが、最も印象的だったのは、問題に対して対策を講じたことがあるかを尋ねるといったものだ。真に困っていれば自発的に何かしらの行動を起こしているはずだろう。反対に、何もしていなければ人任せにしていいレベルと判断できるので、解決の優先度を見極められるのだ。また、具体的な解決策を提案したり実行したりするのではなく、会話を通して解決策を見つける方法に気付いてもらうことで、他の問題にも村人の手で対処できるようにすることは大きな学びとなった。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

現地の人々と対等な関係を築くことの重要性を感じた。援助する側と援助される側という立場だと、受益者は援助者に迎合しいつまでも援助に頼りきった生活になってしまう。そして、援助者本位の現状にそぐわない活動に時間とお金をかけることになる。このスパイラルが循環してはいつまでもたっても状況は変わらない。まずは、両者のパワーバランスを均等にする必要がある。その始めの一步こそが対話なのだ。知識を提供するのは簡単だが、応用性に乏しい。あくまで対話を通して気付きや発見を促し、自発的な行動に繋げることが自然な形での暮らしの向上をもたらすのだと感じた

今後の学習や研究に向けた抱負

途上国での初めてのインタビューを前に本講義を受ける機会をいただき大変感謝している。対話の方法論のみならず、国際協力の概念そのものが大きく変わる時間にもなった。今回学んだ「事実質問」を用いて現地のありのままの姿を見つげられる調査にしていきたいと思う。

鈴木 奈々保

宮城学院女子大学 学芸学部 3年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回、この講義を通して、「ファシリテーション」というものの、本質を知ることができた。私は今まで、「ファシリテーション」とは、問題解決をできるように手助けする人のことだと認識していた。しかし、問題が何であるかや、原因が何かを一切言わない、新しいタイプのファシリテーションを学ぶことができた。また、メタファシリテーションによる、事実質問がとても印象に残った。ここでの重要点は、質問に対しての答え方である。「いつも」、「普段」、「今朝」、などの特定のワードを使うことにより、答えは、単なる考えに繋がっていくということを学んだ。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

グループワークでは、井戸の事例により、様々な意見交換をすることができた。間違っていると思う部分に対し、こうするべきだという指摘を生徒同士で行ったため、中身の濃いワークショップにすることができた。また、様々な意見をまとめたり、模造紙に書き表すことで、自分たちの意見を整理することができ、新たな着眼点も見つけられた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力の在り方は、それぞれの団体などで様々である。金銭的な面の支援や、物資を供給する在り方だったりする。しかし、これらすべてにおいて共通で必要であるのは、現地の人々とのコミュニケーションである。そのためにも、この対話型ファシリテーションは必要不可欠である。相手と、まずは簡単なコミュニケーションをとり、その後に、本質的な質問をすることが重要である。この段階を踏まずに、国際協力をしてしまうと、ミスコミュニケーションにつながり、ただ「魚をあたえるだけ」のものになってしまう。長く継続した支援ができるように、我々は、話し合いの機会の場合などがどれほど重要か理解しておかなければならない。

今後の学習や研究に向けた抱負

今後の学習では、さらに国際協力や、支援、発展途上国について、分野を絞って学習していきたい。また、常にそれらのことを念頭に置き、自分に、何ができるのか、何をすれば状況が改善できるかなどを考えて過ごしたい。

丹野 結

お茶の水女子大学 生活科学部 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

この講義を通じて、わたしは初めてメタファシリテーションという概念を知った。メタファシリテーションとは相手の人に、本音で話してもらうためのコミュニケーションスキルである。メタファシリテーションを用いて質問するときには注意すべき点についても学んだ。事実質問を行うということだ。では、事実質問とは何か。この授業で一番印象に残ったのはこの「事実質問」についてである。はじめ、講師の先生が、クラスの代表者3人に、「あなたは、朝ごはんは何を食べるのが好きですか。」「あなたは、普段朝ごはんは何を食べましたか。」「あなたは、今朝、朝ごはんは何を食べましたか。」という部分的に異なる3つの質問をされた。3人の回答者による答えは、似たような質問内容であるにもかかわらず、同じ人物でもすべて異なるものとなった。このことにとっても驚いたが、なぜこんなに違う回答が得られたのだろうか。講義によると、「現実」というものは3つの構成要素で成り立っているからだと考えられる。一つ目の構成要素は、感情である。上記の一つ目の質問内容がこれにあたる。次に、考え・認識である。いつも、ふだん、よく、たいていななどの頻度や大きい、小さい、多い、少ないなどの形容詞は各々の感覚により異なるので、これらを質問文の中に入めると、回答者が嘘をつかずに回答したとしても事実とは限らない答えになってしまう。最後の構成要素が、事実である。事実質問を適切に行うためにはなぜ、どうしてといったような事実とは限らない言い訳や思い付きによる答えを誘導してしまう可能性の高い疑問視は避けて、何が、いつ、どこで、だれが、どうやってなどの疑問視を用いる。以上のような質問方法によって、会話の中から事実を聞き出すことが可能になることを学んだ。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

私が一番印象に残ったグループワークは最後に行ったメタファシリテーションの練習である。相手の改めたい習慣を聞き、事実質問を繰り返すことで、その人自身が改善策に気付くようにするというものだ。この、事実質問を繰り返すというのが意外と難しく、気を抜いてしまうとルールで禁止されている指摘や提案をしてしまう、あるいは、なぜ、どうしてといったような事実質問ではない質問の仕方をしようとしてしまうことに驚いた。このグループワークを通して、日常会話では無意識のうちに、感情や考えを聞き出すような質問をしているということに気づいた。また、事実質問をしようとするあまり、次の質問が出てこなくて会話が途切れてしまうことも多々あった。普段友人の相談に乗ることもあるので解決に至ることができるだろうと安易に考えていたが、実際にやってみるととても難しく、わたしも、相手も解決方法に気づくことができないままワークが終わってしま

ったのは悔しかった。

この練習の前に行った、ファシリテーションを考えるための事例も面白かった。村のリーダーと思しき中年男性と、国際協力団体に所属する私との会話から、村に井戸を設置し、その経過をたどるといふ事例だ。この事例ではどこが間違っているのかを話し合ったときに、私たちのグループでは村人と「私」の会話から、村のために何を行うかという目標を推定してから、会話のどこを変えればうまくいく可能性があったかを考え、私の質問が誘導尋問のようだという点が問題だととらえた。しかし、ほかのグループの発表と講師の方の話を聞いて、この事例では初めの「この村の一番大きな問題は何ですか」という質問から変えたほうが良いということが分かり、とても衝撃を受けた。この質問は事実質問ではなく、正確には、「この村の一番大きな問題は何だと思っていますか」という感情を問うような質問であったからだ。この事例を通して、フィールドワークを行うときは、上記での述べたように質問方法に気を付けるだけではなく、初めの質問をだれにどのようにするかも重要になってくるということが分かった。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

この講義では初めに、特定非営利活動法人ムラのみらいが1990年代に行った支援の失敗談を聞かせていただいた。私はこれまで、国際協力、地域開発活動と聞くと、一方的に与えるものと、それを受け取るものというイメージが強かった。しかし私の想像とは違い、ムラのみらいの活動は90年代から村人との約束によって成り立っているものだった。村人と井戸の管理を約束したり、ヤギの養育を約束したりと様々な活動に手を広げていたようだ。この話を聞いたとき、村人自ら約束するといったにもかかわらず、その約束を破って期待を裏切るようなことをしてしまうのか不思議でたまらなかった。しかし、講義が進んでいく中で、この活動も与える側の一方向性が大きかったのだと気が付いた。村人自らが自分たちの問題に気が付き、解決法とその解決法を実行するためには何がいるかを理解することが必要だったのではないかと思った。解決法を実行するために必要なものであっても、村人自身で用意できないものもあるかもしれない。そこを援助するために、国際協力や地域開発活動が存在するのではないかと、以前の「与える」「受け取る」の相互関係という考え方から、活動についての理解が自分の中で変化したように感じる。

遠山 藍夏

お茶の水女子大学 生活科学部食物栄養学科 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

1.1 対話型ファシリテーションとは

「対話型ファシリテーション (メタファシリテーション)」におけるファシリテーションとは、一般的にその語から想起される「議論を円滑に進め、全体の意見をまとめること」ではなく、課題を抱える人が自らその課題に気づき、その原因は何か、どのような改善策が相応しいのかを見つけることを手助けする行為である。これは国際協力のみならず、汎用性の高いものである。

メタファシリテーションでは相手に対して質問を投げかけることでその人の状況を細かく引き出していく。この際の質問は事実質問に限られる。ここで「事実」とはもう既に起こってしまっていて変えることができないこと、誰から見ても明らかに確認できるような物事である。現実を構成する3つの要素として感情、考え・認識、事実がある。事実質問のみをするということはすなわち話し手の考え・認識や感情を問うことはしないということである。

1.2 対話型ファシリテーションのコツ

相手に本音で話してもらうためには、聞き手と話し手が対等な関係を築き、「この人がする質問に答えることは困難ではない」「この人には自分のことを話してもよい」と思ってもらい必要がある。また質問に答えることが聞き手にとって役に立つ、有難いことなのだという姿勢を示し、本当に興味をもって聞くことも大切だ。あらかじめ質問に答えることにどれくらい時間を取れるのかを尋ね、その時間内で結論に至ることができるように結論を組み立てる。何について聞くのかは初めに言っても言わなくても良いが、伝えることにより何かしらの先入観が生じ質問に対する答えが左右されうるということは意識しておくべきである。その関係作りのためにまずいきなり本題に入るのではなく、その人が身につけているものや持っているものなどについて尋ねることから始める。

事実質問をする時は、質問が過去形になっていることを意識するのが有効である。また繰り返し質問をしていく中で話し手が「質問攻めにあっている」「尋問を受けているようだ」と感じることを避けるためには、相手の答えをしっかりと聞き、それを受けて次の質問をする必要がある。また話し手が「間違ったことを言ってしまったらどうしよう」などと感じ緊張関係が生じることを避けるために、メモは極力取らないように心がける。思い出して答えてもらいやすいような質問の組み立て方をすると、聞き手が答えを記憶しやすいようになる。

メタファシリテーションにおいて使っても良い、あるいは使ってはいけない疑問詞を表 1 にまとめた。

使っても良い疑問詞	使ってはいけない疑問詞
What 何	Why なぜ
When いつ	How どう
Who 誰	
How many/much 数量・金額	
How どうやって (方法)	
Have you ever~? したことがありますか? (経験)	
Do you know~? ~を知っていますか? (知識)	

表 1

「Why/なぜ」を使って質問すると、返ってくる答えは言い訳や思いつき、その人の認識になってしまうため用いない。「How/どう」を使うと話し手は聞き手が一体何について聞きたいのかを理解できず答えには多くのパターンが生じてしまうため用いない。また「いつも」「普段」「早い」「遅い」など程度を表す語は用いない。これらは科学的根拠や明確な数値によってではなく主観によって決定されるため相互理解が困難であるためだ。

1.3 本当の問題に気づいてもらうポイント

話し手が自らの抱える問題として挙げたものに対し今までに何か対策をとったことがあるのかについて尋ねることが有効である。本当に話し手の中でそれが重大な問題であるとしたら何かしらの対策をとる、あるいはとろうとするはずだからである。ただしこの時解決策は提案してはならない。今までに似たような経験があるか、あるいは身近な人物で似たような経験をした人がいるかを尋ね、あるとしたらその時にどうしたのかと質問することであくまで話し手が自分で結論に至るようにする。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

実際に事実質問をしてみると、なめらかに質問をつなげて相手について知ることはとても難しかった。どうしても「なぜ」「どう」と質問したくなってしまった。自分の改めたい習慣を題材とした練習では、今までにどのような対策をしたか、なぜそれがうまくいかなかったのかを尋ねることでその人の現状がかなりわかったので感動した。また事例を用いたグループワークでは、一見普通の国際協力の話に見えるものが、今回講義で学んだタブ

一などを念頭に置いて読むと本当にたくさん問題があるということに気づいた。また他のグループの発表を聞くことで自分では思いつかなかった問題点があるということも分かりとても参考になった。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

支援者が「途上国の人にはきっとこれが必要なのだろう」と思うものを提案して、途上国の人にも「欲しい」というのだから、とモノや資金を援助するというやり方ではうまくいかないということがよくわかった。こういう支援がしたいからする、というのはただの自己満足になってしまうと思った。本当の問題の原因は何なのか、そもそもそれを問題と思っているのかということは対話をしなければ決して分からないと思う。また文化も言語も違う人と話して何かを一緒にやろうとする時に「いつも」「早い」など曖昧な言葉を使ってしまうことは共通の理解を保つ上で大きな問題であると気づいた。

今後の学習や研究に向けた抱負

スタディツアーでカンボジアに行き、農村でインタビューをする機会があるので今回学んだことを十分に生かして、失礼がなくかつ意味のある対話をしたい。

中村 祐貴

お茶の水女子大学 文教育学部言語文化学科 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

現実には「事実」だけでなく「感情・感覚」「考え・思い込み」の三要素から成るということ朝ごはんの質問の例から分かりやすく理解することができた。改めてその観点から普段の会話を振り返ってみると、確かに、私たちは嘘をついたり作り話をしたりするつもりはないにも関わらず、本当の事実を語ることはほとんどないことに気づかされた。必ずその出来事に加えて感想や推測や意見も伝えている。

私たちが「現実」を知るためにしているつもり質問が「事実質問」になっているかという視点は新鮮であった。具体的で誰の立場からも同じ答えになる事実を引き出すために「何」「いつ」「どこ」「誰」といった単純明瞭な疑問詞を使うこと、副詞や形容詞の認識には個人差があるため必ずしも事実を描写できるわけではないこと、過去の出来事のみを扱うことなどを学んだ。この手法は、途上国支援などの調査だけでなく様々な場面での対話に活かせると感じた。

しかし、獣害の例を用いた練習では「ひどい」「問題だ」といった漠然とした認識や表現の問題点を見落としてしまい、事実質問の実践の難しさを実感した。

「相手の回答に対して質問を重ねる」「相手に思い出させる」「提案はしない」と聞いて、少し不親切なような、対話として不十分になってしまいそうな印象を受けた。相手の状況を押し量ることやこちらの意見を伝えることもコミュニケーションとして大切なのではないかと疑問に思った。しかし講義を通じて、ファシリテーションとしての対話ではこちらが相手の状況について事実を正しく把握することだけでなく、その事実を認識の歪みを取り除いて当事者に自覚させることも重要なのだということが分かった。それまでなんとなく問題だとして不満を持っていたことが実際にはそこまで大きな害にはなっていないことに気付くこともあるという。こちらの予想する答えに誘導したり、相手がこちらの考えを予想して合わせたりしては本当の問題解決にはたどり着かないということだった。

また、講義中の質問にもあったが、「相手の回答に対して質問を重ねる」という点について、インタビューを受けている側からしたら自分の発言の一つ一つを取り上げて詰問されているような気分になるのではないかと私も感じた。しかし実際はそうではなくインタビュー終了後に「話を聞いてくれてありがとう。楽しかった。」と感謝されるほどだというのが印象的だった。思うに、回答に合わせてインタビューが進んでいくため対話の道筋は回答者が作っていくし、「思い出す」ということがこの対話のカギであるため回答者にとっては記憶をたどって思い出話をするような感覚があるのかもしれない。私もぜひこれから事実質問を実践して、相手の言葉を引き出せるようなコミュニケーション能力を身につけていきたいと思った。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

ファシリテーションを考えるための事例として井戸の事例を取り扱ったとき、やりとりの最初から問題点がたくさんあってなかなかこのやりとりの話の筋に沿って進めづらかった。私は誘導的な質問が繰り返されることと支援者の側が主導権を握っていることが特に気になった。しかしグループワークの中で他の班員からそもそものコミュニケーションの不足が指摘され、そこには気付いていなかったので参考になった。

私たちの班が、井戸掘りの合意が為されてからの準備の段階でも支援者ばかりが動いて村人たちと協働するのは実際の作業のみという点に問題があると指摘したとき、予算を作ることはその後の維持管理にもつながるし地域のことに関わるため村人たちと一緒に決めなくてはならないと説明があり、気づけたことが嬉しかった。

メタファシリテーションの練習2で、ペアを組んで改めたい習慣について話し合ったとき、パートナーの人の質問については客観的に、不適切な疑問詞を使っていることに気づいたりこういう質問の仕方をすればいいんじゃないかと思いついたりして、実践できるような気がした。しかし自分が質問する番になると、使える疑問詞を使った質問をしてしまったらもう思いつかず、なかなか進まなかった。やはり他人がやっているのを見ているときは客観視できているが自分のこととなるとその余裕がないのだと感じた。客観的に見て反省することが必要だと思った。

講師の方から「前はどうか」という質問を提案されて、「過去のことを質問する」というポイントを忘れていたことに気がついた。事実質問の理論はすごく合理的で納得しやすいものであるが、注意すべきポイントがいくつもあるため実際にやるとなるとなかなか難しかった。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

ファシリテーションの失敗例として挙げられた井戸の事例、講師の方の実体験の事例などから、支援を受ける側の人々の主体性のなさや無責任さを感じた。困っているのは自分たちのはずなのにどうしてそんなに無関心なのだろうかと違和感があった。しかし講義中の「本当に困っているなら、本当に大きな問題なら、人は行動を起こすもの」という言葉から示唆を得たように思う。当事者たちに問題点を自覚させることも対話型ファシリテーションの主な役割である。例えば井戸の事例では、誘導的な質問が繰り返されたために支援する側が予想していた援助が必要だという結論になった。これでは支援される側に主体性など生まれるはずがない。そのような態度を作り出さないためにもこの対話方法が有効なのだと分かった。

また、対話の基礎になる対等な関係やコミュニケーションの充実も重要なのだと分かった。支援する側・される側という構造がはっきりするとどうしてもされる側は受け身になってしまい責任感を感じることはないだろう。みんなが参加して、一緒に解決させるのだという実感が必要である。

特に印象的だったのは、「貧しいということは問題ではない」ということである。言われてみれば確かに、経済的に貧しいということは相対的なものであるし、そこで暮らす人々は昔からその状況で生きてきたのだからそれ自体が問題だとは言えないと納得した。やはり、貧困のその上に生まれた問題をきちんと見つけて解決策を共に探すことが重要のだと感じた。

西前 日花理

お茶の水女子大学 生活科学部人間生活学科 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回の講義で最も印象に残ったことは、途上国の人々が日本人を見た時にどう思い、どう行動するのかということだった。「たとえそれが学生であろうとも、彼らが日本人の背後に思い浮かべるのは¥マークだ」という前川講師の言葉に衝撃を受けた。日本人すなわち支援してくれる人、というような彼らの色眼鏡を取り払うためにも、彼らに「この人たちに支援してもらうためにはこう答えなければ」という思考を働かせないためにも、事実質問を繰り返すことがどれだけ大切かを知った。

同時に、彼ら途上国の人々にとって、被支援者という立場に慣れきってしまうことの問題点も感じた。短期的には助けてもらえて良いかもしれないが、自立ができない村落のままだと、長期的にはその村のためにならない。さらに、我々の態度がそれを助長しているということも知ってショックを受けた。こちら側が先進国から赴いているという優越感を抱くことで、彼らもまた格差を感じ、支援-被支援の関係がさらに崩しにくいものとなっている。調査の際の態度として、相手に失礼がないようにといった基本的マナーだけではなく、インタビュアーとインタビュイーに経済的格差があるという関係ならではの注意点があるのだと痛感した。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

ペアワークで、相手の持ち物から事実質問のみを用いて、自分の望む情報を聞き出すことの難しさを感じた。初対面の人と話を広げるにはいいが、明確な目的を持った上での質問では、その人自身の状況を知りたくて How や What を使いたくなってしまって困った。また、ケースワークでは、自分が考えたよりももっと根本的なところに解決策を置いたグループがあり、視野を広く持つと新たな視点が得られるのだと実感した。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

開発途上国に行って学校を建てる、農村に行って支援をする等の様々な取り組みが先進国主体で行われているが、これらが本当に彼らの自立のためになっているとは限らないと知った。その上で、物的支援だけを提供することは先進国の人々の寄付金を無駄にすることになりかねない。物的支援に付随した形で、より親密できめ細やかな技術支援も行うべきだと思う。

古山 玲奈

お茶の水女子大学 文教育学部人文学科地理学コース 2年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回の講義では、NPO 法人ムラのミライで事務局次長を務める前川香子さんに「対話型ファシリテーション」についてのお話を伺った。「ファシリテーション」とは会議等でグループ活動が円滑に行われるように、合意形成や問題解決を援助する方法・役割を指す。ムラのミライは「ファシリテーション」の軸に「対話」を据えた、「対話型ファシリテーション」というコミュニケーション法を体系化している。この方法では、対話を通じて当事者が主体的に問題の原因や解決策への「気づき」を獲得できるよう促すことを目的とする。また、この「対話」で重要となるのが「事実質問」なるものである。

「事実質問」とは、当事者の考えや認識を聞くのではなく、事実に対する問いかけを行い、現状の正確な把握を目指す。これは当事者の深い理解を可能にするとともに、質問者と当事者に共通の認識をもたらすという効果がある。そしてこのような「事実質問」を行うことは、問題の本当の原因への「気づき」につながる。

私は、「事実質問」を行うことで当事者と質問者との間に共通認識を獲得できるということが大変印象に残った。例えば、「お腹いっぱい」ということについて考えてみよう。私の基準では、「お腹いっぱい」はお腹が苦しくて動くことですら苦痛の状態を指す。しかし、途上国の人にとってはお茶碗一杯のお米が「お腹いっぱい」かもしれない。

開発支援のことにに関して言えば、「貧しさ」の基準も当事者と我々との間で当然異なる。一見当たり前のことのように思えるが、支援を行おうと考える際、支援する側の人間は支援される側の人間の生活に不足しているものは何かということを自身の生活基準で考えてしまっているのではないだろうか。これでは、根本原因の解決には程遠い。「支援」ということを考える上では、自身の基準を一度脇に置いて、当事者にとっての「事実」に寄り添う意識を我々は持たねばならない。

しかし、「事実」や「本当の原因」、「解決策」には一つの「真の」ものが存在するのだろうか。個人にとって「事実」は異なるし、「真の」「原因」や「解決策」なるものも必ずしも一つの正解があるということは決してないと思う。その中で一つの「事実」「原因」「解決策」を選択した場合、捨てられた「それら」はどうなってしまうのだろうか。「事実質問」は個人レベルから全体レベルに引き上げた時に、どの程度有効性があるものなのかは正直疑問に思うところである。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

講義内では、3つのグループワークを行なった。1つ目は、「対話型ファシリテーション」の練習として、「これは何ですか」という質問から事実質問のみを用いて相手のことを知るといったものだ。2つ目は、井戸の事例を通じたファシリテーションの失敗談から問題点を探るといったものである。そして3つ目は、「事実質問」を使って改めたい習慣の改善策に相手自身で気づいてもらうといったものだ。

この3つのグループワークの中で最も難しいと感じたのは、3つ目の相手の「気づき」を引き出すというものである。ここで質問者が当事者に対し提案することは禁止事項である。質問者は、あくまで当事者の「気づき」を促す補助者という立場であることを忘れてはならない。質問者は自身の設定したゴールとそこまでの道があるにもかかわらず、それに付き従うことのない当事者とゴールの見えない「対話」をしなければならない。端的に言ってしまうと、非効率的である。しかし、この「対話」は質問者にも可能性を与える。というのも、予想外の返答をする当事者から新たな「気づき」を獲得できる可能性があるからだ。質問者は一見「対話」の主導者のように見えるが、実際は当事者と質問者とが合

わさって「対話」を創造している。つまり、途上国の人の支援を考える上で、可能性の模索は（上の「対話」から分かるように）当事者と支援者とが合わさって創造主とならなければならないことを、両者が十分理解する必要があるのだ。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

今回の講義を受けるまで私は支援を行う上での「対等な関係」とは、先進国側が途上国側に基準を下げることであったと思う。つまり、上から視線をやめるということである。しかし、支援する側の人間が本当に止めなければならないのは上から視線ではなく「遠慮」ではないだろうか。

前川さんは講義の中で、インドのある村で相手側が提示する日程での話し合いを約束したにもかかわらず相手側がそれを守らなかったため、相手側が慌てる中何もせず帰ったというエピソードを話してくださった。前川さんは「態度で示した」のだと仰っていた。これこそ「対等な関係」なのではないだろうか。生活環境というプライベートな空間に踏み込む以上、互いの信頼関係はすべての前提となることである。その信頼関係を構築する上で、「遠慮」はある意味信頼していないことの証となってしまう。怒るべき時は怒り、悲しむべき時は悲しみ、喜ぶべき時は喜ぶことで互いの信頼関係は創られる。つまり、「遠慮」してはならないのだ。支援者は「途上国だから」という理由で全てを許容するような態度をとってはならない。「対等な関係」を目指すのならば、互いの国家の水準、支援する側、される側などといった既存の関係性を打ち壊し、同志や仲間といった関係性を構築してこそ意味のある「対等な関係」が築けるのではないだろうか。

今後の学習や研究に向けた抱負

この夏に行うネパールスタディーツアーでは、今回の講義で学んだことを生かし「事実質問」を実践してみようと思う。私は今回のツアーで、「自立を考える」ということを主軸としている。ネパールの方々に実際に「事実質問」をし、私基準ではない「自立」に対する知見が得られればと思う。

福原 玲於茄

宇都宮大学 国際学部国際学科 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

私がこの講義を通して学んだことは大きく2つある。1つは「事実」を追究することの重要性や面白さを学び、事実質問を意識することができるようになったことである。事実質問は、途上国の人と話すときはもちろんだが、日常生活においても使えるという点が大

変印象的であった。例えば、開発協力の現場において、あいまいな副詞や形容詞を具体的に定義することで、それまで見えなかった、その開発の将来性や持続性が見え、より効率的な開発援助が可能になると考える。同じように日常生活においても、事実質問を通してある問題の原因は自分が考えていたところとは異なるところにあるのだと気づくことも事実質問をすることの大きな利点であると感じた。2つ目は、メタファシリテーションについてである。調査をするにあたって、支援される側と支援する側という関係がつけられてしまっている場合、支援される側は「何かしてくれるかもしれない」という受け身の立場になってしまうという問題点が挙げられた。この関係を壊し、新しい対等な関係作りが開発を進めるにあたっての基礎的な部分であると感じ、今後の自分自身の調査に大いに役に立つ部分であると感じた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

人の生活状況や真の答えを引き出すために、「何」「いつ」といったような事実のみを問う疑問詞に限定して会話を行うのは想像以上に難しく、私たちが普段何気なく会話の中で使っている疑問詞、またそれに対する回答がいかに関係と感情と認識を混同してしまっているかを痛感した。また私にとっての「普通」と相手にとっての「普通」は大きく異なることもグループワークを通して感じた。副詞には個人差があり、それを具体的に掘り下げていくことで私たちが問題の本質に気づくことができたり、相手から質問されて気づかされたりする事もあるのだと知ることができた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

私は今まで、開発協力をするときのスタンスとして、援助する側が、問題点を発見し、主となる計画書を作ったのちに現地の人と一緒に活動するものだと考えていた。しかし、それは見かけの援助の仕方であり、物資供給とさほど変わらないのではないかと感じた。国際協力や地域開発活動において、対等な立場で現地の人と接するという事は私自身も以前から認識はしていたが、持続性や将来性のある開発をするには、開発コンサルタントや調査する側の事実質問をする力が大きく関わっているのではないかと考え、開発に携わるすべての人に責任感を与えることもファシリテーションの役割なのではないかと感じた。

今後の学習や研究に向けた抱負

私は将来、発展途上国と先進国の格差是正に貢献したいと考えている。具体的には、発展途上国、特にアフリカの国々の開発援助に携わりたいと考えている。今回の講座を通して、開発援助をするにあたって最も重要となるのは事前調査であると感じた。特に農村開発において、普及される農耕技術や農耕器具によってはその地域を壊しかねない。そのた

め事前調査は慎重に行わなければならないものだと考える。今回の講義で学んだ事実質問に磨きをかけ、問題の本質や現状を探り、相手に気づかせる手伝いをする事で真の自助努力が可能になるのではないかと考える。そして私自身も、援助する側が自己満足で終わらない開発協力をしていきたい。

堀之内 あゆ

お茶の水女子大学 理学部 3年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

講義を通じて「事実質問」によって、根本的な問題を発見することがどれほど難しいことなのかを実感できた。相手の答えに対してまた質問を重ねていくことで、村やコミュニティの“事実”を把握し、相手の相談事を引き出したり、要望を促したりすることができる。そして初めて支援につながることを知り、改めて発展途上国の自立を支援する活動の難しさを感じた。

また、事実質問は単なる質問であって、尋問になってはならない、ということも学んだ。相手の人に本音で話してもらうには、対等な関係づくりが不可欠である。しかし、村の問題を突き詰めていけばいくほど厳しい質問をつきつけなければならないのではないかと思ひ、対話の組み立て方なども、さらに学んでいきたいと感じた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

メタファシリテーションの一つ目の練習において、相手を知ろうとするとき、「なぜ？」「どう？」「どのくらい？」のような普段ならしてしまう質問ができなかったため、歯がゆい気持ちになったが、質問を重ねるうちに相手の答えに合わせて質問を考えることが段々とできるようになったため、相手の答えをしっかりと聞くことの大事さを実感した。

グループワークを通じて最も印象に残ったことは、不適切な質問を事実質問に変える課題で試行錯誤したことである。例として挙げられていた井戸の事例では、井戸が完成してすぐは良かったのだが、その後の管理体制が上手く敷かれておらず、結局井戸は使われなくなってしまった。一歩的に与えるだけの援助は成り立たないのだと思った。また、グループ内・外で意見を交換することで自分では思いつかない多様な意見を得ることができたと思う。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

前川様のお話を聞き、発展途上国や開発の進んでいない地域の方と話す上で、当たり前かもしれないが、必ずしも自分と感覚や常識が一致していないということが分かった。例

例えば、時間通りに人が集まらなかったり、頻度に関して「多い」と言われてきたことをよくよく調べてみると年に数回だけであったり、自分が思い描いた回答や行動が実現しない場合もある。そういったギャップを埋めるためにも、事実質問を繰り返し行うことで根本的な解決策を共に考えていけるのだと考える。

今後の学習や研究に向けた抱負

今後の学習や研究において、聞き取り調査等を行う場合があるときには、今回学んだ「事実質問」を念頭に置き、相手と対等な立場で、気持ちの良い対話を心がけて行いようになりたいと思う。

政木 優子

お茶の水女子大学 文教育学部言語文化学科英語圏言語文化コース 3年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

講義の最初に前川さまがおっしゃっていたように、「ファシリテーション」というと、会議などの話し合いを円滑に進むように文字通り「促進」する役割のことを指していると思っていた。しかし実際はそのような積極的な働きかけではなく、相手の「気づき」を尊重した、真の意味での国際協力・地域開発活動につながる手立てであった。

具体的には、使っても良い疑問詞を使うことで相手の本音を引き出し、事実を知ることが出来るという手法の練習が大変印象に残っている。特にメタファシリテーションの練習の二つ目では、自分では相手の悩みの理由に見当がついても、それを指摘したり提案したりするのでは本当の対話型ファシリテーションとはいえないということで、会話の進め方に苦勞した。しかし、そうしてどのように話せば相手が自分自身で改善策に気づくかどうか模索することが、対話型ファシリテーションの成功につながるのではないかと感じた。

また、前川さまは具体的かつ問いかけをたくさん用いながら私たちに話してくださったので、対話型ファシリテーションについて一方的に教えていただいたという印象ではなく、自分たちで「このようなものなのか」と少しずつ実感していったという感覚がある。それは、今回の前川さまのご講義自体が「対話型ファシリテーション」であり、私たちは知らぬ間にメタファシリテーションについて習得することができたことを示しているように思う。改めて対話型ファシリテーションの力の大きさを感じるとともに前川さまの手法の秀逸さに感銘を受けた。

グループワークや討論を通じて学んだこと・印象に残ったこと

グループで「途上国の人々との話し方」内の事例をどのように修正すべきか考えて発表した活動では、対話型ファシリテーションの手法を実践的に練習することができただけで

はなく、グループで話し合い、発表まで行うことを通してコミュニケーション能力の向上を図ることができた。例えば、話し合った内容を模造紙に書き出しまとめる作業の際は、改めて役割分担を決めることなく、自然と「改善すべき点を書く人」「改善後のセリフを書く人」「改善したポイントを書く人」に分かれてまとめることができた。これは、それまでの話し合いを通してメンバーの間で互いに信頼関係が構築され、個人個人が自分のやるべきことを的確に判断した結果であろう。グループワークの時間は1時間にも満たないものであった上に、メンバーの学年も1年生から3年生と幅があったが、「より良い対話型ファシリテーションのために」という目的のもと集中して話し合いを行ったがゆえに団結力が生まれたのだと感じた。

また、他グループの発表を聞くことで、自分たちのグループでは「出し切った」はずのアイデアに、さらなる熟考の余地があったことに気づかされた。私たちのグループでは問題ないとして指摘されなかった箇所に改善点を発表したグループがあり、互いに発表することで新たな気づきが得られるのだと感じた。発表前は「どのグループも同じようなことを思いつくのだろうから、発表は省略しても良いのでは」と思っていた自分が恥ずかしくなるくらい、実り多き共有の時間であった。他のグループの発表を聞いた上で今一度事例を見直してみると、自分乃至自分のグループ内で考えていた時以上に問題だと感じる点が増えたとともに、対話型ファシリテーションへの理解がより深まったように思う。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

私はこれまで大学の授業で NPO や教育開発に関して学び、国際協力や地域開発について随分と見識を深めた気になっていた。しかし、今回の活動を通して、自分のこれまでの学びは表面的な、問題の解決法を机上で学んでいたに過ぎないものであったと気づかされた。国際協力について、また、地域開発活動について考えたことをそれぞれ分けて述べる。

まず、国際協力について考えたことを述べる。開発途上国の人々と話をする際に、事実質問が有効であることを前川さまのお話やペアワーク、グループワークを通して実感することができた。私自身のごく最近の体験を述べると、インターンシップの感想を聞かれた際に「どうだった？」と問いかけられ、内容の難易度や充実度合いを聞いているのか、その会社に対する考えを聞いているのかよくわからず、「よかった」という無難な返答しかできなかった体験がある。このような、How を使った疑問文ではなく、What や When を用いた質問をすることで、開発途上国の人々の「事実」が導き出されるだろう。しかし、国際協力として開発途上国の人々と話す場合、言語という問題が生まれるはずだ。往々にして開発途上国の人々とコミュニケーションを取る際は、自らの母語とは異なる言語を用いて話す必要があるだろう。私たち日本人が話す場合は、英語を使う場合が多いかと思う。使用する言語が母語ではないとなると、話をつなげるのに精一杯で、事実質問かそうでないかを考える余裕もなく言葉を紡いでしまう恐れがあるのではないかと感じた。今回事実

質問について理論を学んだので、前川さまがアドバイスをくださったように、なるべく普段の生活の中で事実質問をする努力をしようと思う。日本語でできないものをましてや外国語ではできるはずもないと考えたからだ。

次に、地域開発活動についてどのようなことを考えたか述べる。地域開発活動を行う際は、先に述べたような、外国語を話すがゆえのコミュニケーションの問題は起こりにくいだろう。しかし、だからといってメタファシリテーションを簡単に行えるわけではない。ペアワークで互いの持ち物一つに対して「これは何ですか？」と質問することから始めた練習、改めたい習慣について話した練習はどちらも日本語で行ったが、「次は何を言ったら良いのだろう」と感じ、言葉が詰まった場面が何度もあった。日本語であろうと外国語であろうとメタファシリテーションをスムーズに行うには訓練が必要であるということだろう。前川さまがこうした練習を取り入れてくださったおかげで、メタファシリテーションを「わかったつもり」「できるようになったつもり」で自己満足に終わることを防ぐことができた。

このように、国際協力や地域開発活動などは理論を学ぶだけではなく、実際に活動してみても初めて本当の国際協力・地域開発につながり、ひいては自分の「身になる」ものなのだと感じた。

松本 あすみ

お茶の女子大学 生活科学部食物栄養学科 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

途上国へ行って何か支援をしようとする時、問題は何かを聞き、それを彼らたち自身で解決し、より良い生活を持続的に送ってもらおうと何か手助けをしても、結局すぐに元どおりになってしまうことを知った。井戸を掘っても数年で使えなくなり、子ヤギを与えても食べてしまい、木を植えても枯らしてしまうということを聞き驚いた。現地の状況を変えるには、私たちが何かをするのではなく、現地の人が自分たち自身で、問題に気づき、変えようと行動しなければならないのだと学んだ。そのためには、問題を最初から聞くのではなく、実際の生活を共にし、様々な話をし、時間をかけて現地のことを知ることが不可欠だと知った。実際のことを知るための方法として、「事実質問」の仕方を学び、事実と考えの違いについて初めて意識しました。似た様な質問をしても文言が少し違うと、その答えが変わってしまうことを知り、事実質問かどうかということをきちんと意識する必要があると気づいた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

定められた時間の中で意見をまとめるのが難しかった。論点は何かを班の人全員が共有し、また、班の人全員が話しやすい雰囲気を作ることが、グループワークを進める上で大切だと気がついた。他の班の発表を聞き、自分たちの班だけでは気づかなかった意見を多く聞くことができ、勉強になった。支援に行く時には、自分たちの考えを押し付けに行くのではなく、あくまでも住民主体で提案や行動をする必要があると知った。そのために現地のリーダーなど特定の人だけではなく、多くの人から様々な情報を得ることが大切だと知った。また、予算の計画も住民たちで作ることで、維持や修理に必要な金額なども知ることができるので予算も住民自身で計画することが大切だということが印象に残った。

国際協力や地域開発活動について考えたこと、今後の抱負

自分たちが支援する側、途上国の人たちは支援される側、という認識を持っている限りは、その状況は変わらないのではないかとすることに気がついた。途上国の人たちが抱えているであろう問題は、先進国の私たちが解決してあげべきことではないのかもしれないと思った。途上国の人たち自身が、自分たちの問題を正しく認識し、自分たちでそれを改善して行く、その時に請われれば力を貸し、一緒に取り組んで行く、という形が理想的なのではないかと考えた。

今後の学習や研究に向けた抱負

今年の夏休みにネパールに行き、現地の人々と交流する機会があるので、その時に事実質問を使いこなし現場の状況を正確に理解したいと思う。こちら側の決めつけでものを見るのではなく、ありのままを持ち帰りたいと思う。

山口 紀子

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻

国際日本学領域 博士後期課程 1年

近年、日本語教育界でも「教師はファシリテーターたれ」といわれ、学習者の学びを支援し、自立／自律的な学習者を育てることこそが教師の役割であるという考えが一般的になりつつあるとともに、どのような支援が必要なのかという問題には多くの教師が頭を悩ませている。私が派遣教師として開発途上国の日本語教育に携わっていた間も、教育の現場やそれ以外で、支援する側からされる側への「段階的な自立」という期待と、支援を受ける側から与える側への「永続的な支援」という期待がすれ違い、支援が必ずしもうまく機能しない場面をたびたび経験し、「本当に必要な支援の在り方」に疑問を感じてきた。

「対話型ファシリテーション」は、まさにこのような疑問に長く直面してきたNPOムラのミライが辿りついた解決策であり、本当に聞きたい現地の現実を引き出すインタビュー法を用いることで、対象者自身が課題に気づいて改善策を見い出せるようなファシリテートを実現する方法として成果を収めていると知り、共感と期待を持って参加した。

いかに対象者から本音を聞き出すか。それをどう支援につなげるか。そのカギを握る手法として提案されたのが「事実質問」である。これは「現実とは、事実・その人の考え・感情の3要素で構成されている」という認識のもと、本当の現実を知るためには「考え」ではなく「事実」に着目すべきと考え、実際に在ったこと、現在起きていることなどの事実だけを具体的に問うていく質問の手法である。支援者側がよく用いる「何に困っているか」「どんな支援が必要か」という問いは、実は相手の考えを問うものであって事実を聞き出してはいないのだ。そのため本当に必要な支援に気付かず失敗してしまう。事実としての現実に迫るには事実のみを問い続ける必要がある、という指摘には説得力があった。

実際に事実質問のワークに取り組んでみると、ただ事実のみを問うということが、それほど簡単なものではないことに気づく。自己紹介替わりの簡単な質問タスクでは、本当に知りたい相手の事実まで辿りつくことができなかった。途上国のNGOプロジェクトの顛末を検討するケーススタディでは、事実質問と誘導質問の混用を指摘されもした。また、対象者に課題認識と改善策の気づきを促すペアワークでは、一向に改善策に至らない相手に対し、提案を仄めかしたい気持ちを抑えるのは容易でなかった。

実際の調査場面では、相手の考えや要望を追求し、提案や指摘をすることが有効な場面もある。しかしムラのミライの「事実質問に徹する」という姿勢は「事実と意見を混同しない」という極めて根本的な調査の留意点を再認識させてくれ、そのための具体的方略を示してくれた。事実を見極めることが、支援する側とされる側の間の認識のずれを正し、課題改善に必要な方策に気づかせ、持続的で実現可能な自立への道へと導いてくれる道標となるだろう。

吉田 真音

お茶の水女子大学 文教育学部 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回私がこの講義で学んだのは、「適切なコミュニケーションの重要性」である。今回の講義を受ける前は、スタディツアーでネパールを訪問するにあたって、百聞は一見に如かずなので、実際に自分の目で見て多くのことを学ぼうと思っていた。しかし、前川氏のお話を聞き、ただ見ているだけでは現地の人の本音や、問題解決のために本当に必要なことは見えてこないのだということに気付かされた。特に、講義の中では実際に前川氏が見聞きした事例を具体例として提示して頂き、コミュニケーションによって問題の解決が大きく左右されることを実感することが出来た。

また、私にとって印象的だったのは、対話型ファシリテーションの手法として事実質問のみを行うということである。普段日常で他者とコミュニケーションをとる時、私たちはしばしば相手の話を自分の価値観を元に解釈し、それを相手と共有することでコミュニケーションをはかっている。しかし、発展途上国の人々と対話したり、何か問題を発見し解決策を練る際には、人によってももの感覚は異なり、それを考慮に入れないと適切なコミュニケーションは取れないのだということを学んだ。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

実際に友人と事実質問のみで対話を行った際には、その難しさに驚き、普段いかに自分の解釈を混ぜて人と対話しているかを痛感した。Why（なぜ）、How（どう）や、頻度を示す副詞は NG word として扱われたが、これらの言葉を使わずにスムーズに対話を進めることが出来ず、「事実を聞く」とは普段自分が行っているコミュニケーションとどのように異なるのかを、実際に行ってみることで理解することが出来た。

また、実際の実例を用いてグループワークを行った際には、一見問題なく支援活動を行っているように見える事例が、事実質問に基づく対話型ファシリテーションの手法を用いてみると間違っている点だけで、新たに出来上がったコミュニケーションは元のものとは大きく異なっていることに衝撃を受けた。他の班の発表を聞く中でも、自分たちが見落としていた問題点を指摘していて、他者と共同してコミュニケーションを図ることで、より問題を明確にし、適切なものに繋げることが出来るのだと知ることが出来た。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

今回国際協力や地域開発活動に実際に関わっていらっしゃる前川氏のお話を聞き、衝撃だったのは、援助を行ってもそれがその地域の人々にとって持続的なものになるとは必ずしも言えず、支援とは地域の人々と共同で行って、持続可能なものにする必要があるということだ。国際協力や地域支援と聞くと、金銭的や技術的なものの不足が原因で、それを援助することばかりをイメージしていたが、それは大きな間違いであることを学んだ。現在あらゆる地域や団体で、人が人を助け合う活動が行われていると思うが、自分がその一員になる際、支援の手法は適切か、長期的な改善に繋がっているかなど、冷静に客観的に判断したいと考えた。支援者にとっても、支援を受ける側にとっても、一時的な自己満足に終わらず、今問題を抱えている地域や人が本当に改善された生活を送れるよう、正しい手法や適切な捉え方を身につけたいと感じた。

今後の学習や研究に向けた抱負

今後私は、国際共生社会論実習の中でネパールへの現地訪問を行う。現地にいるのは短い期間ではあるが、実際に体験している人と対話を行うことで得るものが大きいことを今

回学んだため、この学びを生かして、現地の人々に事実質問を行い、より現状を明確にした研究を行いたいと考えた。そのためにも、予め予備知識をつけ、調査や質問の目的や手法を明確に決め、調査に臨みたいと考える。

内山 みどり

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

ジェンダー社会科学専攻 博士前期課程1年

ファシリテーションとは、問題の所在、そして解決策を当事者自身が発見するのを手助けすること。そう頭では理解していたつもりだった。しかし、いざワークショップで対話型ファシリテーションの一端に触れると、予想以上の難しさに加え問いかけの行為が持つ奥深さをも体感することとなった。

2017年7月22日、大学間連携イベント「『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方」が開催され、NPO法人ムラのみライの前川香子先生よりご指導いただいた。前川先生は、約10年間インドの農村で対話型ファシリテーションを実践してこられた。参加学生は、本学をはじめ、奈良女子大学、宮城学院女子大学、宇都宮大学から計29名だった。国内外でのフィールド調査にこれから臨む学生も半数近くおり、それぞれの場で実践を試みようとする意欲が溢れていた。

ワークショップ前半では、まずファシリテーションの基本として、会話相手とそれを取りまく事実を把握するための問いの種類を学び、相手を知ることがゴールにペアで問いかけの練習をした。そもそも事実とは感情、考え・認識と並んで現実を構成する3要素のひとつであり、解決すべき問題の特定には必要不可欠な情報だ。ここで難しいのが、質問の際に使用がふさわしくない疑問詞・副詞があるということだ。たとえば、「なぜ？」や「どう？」、相手との感覚的なズレが生じやすい「たいてい」「ふだん」といった表現だ。いずれも問うて引き出された答えはあくまで相手の認識であり、事実とは限らない。解決すべき問題の所在やその原因をつきとめるのに直結する情報ではないのだ。

後半は、ケーススタディとして示された村人とNGO職員との会話のやりとりを基に、村人自身が問題を特定し、その原因と解決策を考えられるような質問を考え、グループごとに発表していった。そこでは、いかに普段私たちが無意識的に相手に解決策を提示し、誘導しがちであるかを自覚した。対話型ファシリテーションが求められる場面において、それは相手の自立を阻む行為になりうる。自分の問いかけや語りかけが相手に及ぼす影響の大きさを知った。

最後に、前川先生から日常生活での対話型ファシリテーションの練習方法が3つ紹介された。そのひとつに、身近な人の悩み相談にのるというものがある。ただしその際、決して解決策を提案してはならない。アドバイスをしたくなるおせっかいさを封印し、相手にひたすら事実質問をするということが果たして私には出来るだろうか。途上国での開発事業にとどまらず、日常生活の随所に実践の場面がある。早速はじめてみようと思う。

あらためて、この学びの機会を設けてくださったグローバル協力センターの先生方、みなさまに感謝したい。

(グローバル協力センターホームページ掲載報告書)

今井 梨夏子

お茶の水女子大学 文教育学部言語文化学科 2年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

まず、事実質問というキーワードを今回初めて聞いたが、一見同じような質問でも少しのニュアンスや視点の違いで、それが事実質問なのか、はたまた個人の感情や考え・認識を問う質問に変わってしまうかが変わると学び興味深かった。また、国際協力やフィールドワークなどで現地の一般的な現状はその改善を目指そうとする時に、「なぜ～なのか」「どう私たちは支援すれば良いか」など Why や How を使った質問を聞くことが多い印象を受けるが、実はこれは事実を知ったりホンネを引き出ししたりするためには決して望ましい疑問詞ではなく、むしろその一瞬の思いつきなどが返ってくることもあるため避けるべきだと学んだ。私自身振り返ってみるとこの二つの疑問詞をよく用いるように感じるし、今までのフィールドワークでも多用していた気がするので、とても勉強になった。事実やホンネを聞きたい時には、普段や意識しないような細部にまで注意を払わなければならないと知り、今までの自分の甘さを痛感したと同時に、今後は日常生活からも事実質問を意識してみようと思った。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークでは、ある国際協力の失敗例からどの点が間違っていたのかを考え、どう直せばよかったのかを考えたが、まずたった一つの間違った問題がその先にもずっと影響してくるのだと痛感した。ある質問によってその対話の方向性は決まってしまうし、その質問次第で返答も変わってくるから、今回のお題である“ただ誤っている点を指摘して直す”という行為は正直難しかった。ただ、これは実際に自分の身にも起こり得ることで

あり、どこかで適当でない質問をすることで対話の有効性も変わってしまうから、私自身フィールドワークや国際協力を行う際には一つ一つの質問に意識を向けなければならないなど感じた。また、そもそもこの事例で起きていることを考える時に“そもそもそれは問題なのか、問題ならばその原因は何か”を考える視点が個人的に印象に残った。私は今回このグループワークを行うにあたって、「この村には綺麗な水へのアクセスに問題がある」という前提で物事を考えていたが、そもそも彼らにとって本当に問題ならば村人が何かしらアクションを起こすはずだし、対策は知っているけど理由があってアクションを起こせていないのか否かを見つけ出す必要があると学んだ。さらに、「その人にとって問題でないならば何もなくて良い」という前川さんの言葉は、“国際協力=何かをする”と捉えていた私にとっては新しいものの見方で衝撃を受けた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

上にも既に記述したが、まず国際協力や地域開発活動を行うにあたって私たちはその地域の現状を知る必要があるということは以前から知っていたが、その聞き方まで知っていたかと言われると、決してそんなことはなく、むしろ事実やホンネを聞き出す方法にまで意識を向ける大切さをこのワークショップで初めて学んだ。国際協力などを考える時に我々は、どんな支援を、どれぐらい、どのようにしてやろうかと自国で考えがちである印象を受けるが、現地の人々が本当により幸せになるためにはまず何よりも国際協力だったり地域開発だったりということを全て忘れて現地へ行き、そこに暮らす人々と関係を作ることが大切になるのではないかと感じる。一国の問題という大きなものが、自国にいたままメディアや他者からの情報だけではわかるはずもないし、たとえ現地へ行ったとしても、「調査」といことを念頭に置いたたったの1~2週間での聞き取りでは、現地の人々が本当に必要としている問題よりも、他国と比べた際に顕著に現れる問題点くらいしか結局手に入れることしかできないであろう。私はこういった問題を考える際に、現地で生活する中で自分自身が問題点を発見するのがより理想的であると思うし、人々と徐々に関係を築いていく中で自分自身が問題点を発見するのがより理想的であると思うし、人々と徐々に関係を築いていく中で住民たちも我々外部者に本心を見せてくれるようになるだろう。そして、私たちは一般的に国際協力・地域開発研究を行うときに何かしらのアクションを起こすことを必須事項とし、何かしらの支援をしようとしているが、私としては現地で生活する中で現地の人々が十分今の生活に満足しているならば“何もしない”ということも選択肢の一つとして大いにありなのではないかとも感じる。国際協力や地域開発研究は現地の人びとのために行うものであり、その視点を決して忘れてはならないと感じている。

高井 映見

奈良女子大学 生活環境学部生活文化学科 4年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

そもそも本講義『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方では、国際協力の現場における課題発見・解決を促す実践的な手法である「対話型ファシリテーション」を学び、現場に存在する根本的なニーズの把握や、その結果の外部者による援助の在り方への影響といったことを疑似体験し理解することを目的としていた。(本講義ポスターより引用)しかし、当日の内容は必ずしも国際協力や途上国の話題に限らなかったと思った。確かに、講師の方は現場での経験も豊富な方で、実際の活動のお話も一部分ながら伺うことができた。だが、講義の内容が、題名の通り途上国の人々との話し方に重きを置かれていたかという点、それは違う。講師の方のお話にもあったように、今回ご紹介頂き、学習・実践した対話法は「対途上国」に限らない、日常生活にも十分使えるものだったからだ。

講義中の対話法や様々な考え方は、目からウロコの連続であった。元々「コミュニケーション」や「異文化理解」に興味があり、これまでの学生時代にも授業や実践で少なからず学んできたが、様々な具体例や幾度の実践練習を通して説明して下さったことで、大変わかりやすく理解が深まった。貴重な機会を頂けたことに感謝申し上げたい。

この度の講義の中で、特に「事実質問」についてのことが強く印象に残っている。専門分野でもなく、事前の学習が浅かった私にとっては、きわめて新しい考え方であり、視野が広がった。事実質問を組み立てて行うものがメタファシリテーションであり、相手の人に本音で話してもらい、対等な関係づくりを築くために事実質問をつくっておくことが重要となってくるという。確かに、唐突に現れ、近づいてきた素性もよくわからない人間に、急速に根掘り葉掘りといろいろ聞かれるのは、いい気持ちがしないだろう。それどころか、そもそも話そう、全部の質問に対して答えようとも思えないだろう。途上国で援助をする上では特に、最初の本題に入るまでも含めた対話の始め方や、対等な関係づくりが重要となってくるだろう。

事実質問の事実とは、実際に過去に起こって、もう変わらないことだ。ではどうしたら、事実がわかるのだろうか。現実を構成する3つの要素には「1感情」「2考え・知識」「3事実」があるとの話があった。調査をする際、2の考えを知ることが重要だが、3の事実も知らなければならないのだ。じゃあどのようにしたら、事実を聞き出すことができるのだろうか。具体的に、事実を知る、本音を引き出すために、使う/使ってはいけない疑問詞や、「よく」などの副詞を用いないこと、質問が過去形になっていることがポイントとなってくる。「いつも」「よく」「普段」などの言葉は「考え」につながる言葉であるため、「私」が思っている頻度や感覚は、「相手」とは違う。そのギャップを埋めるためにしかるべき疑

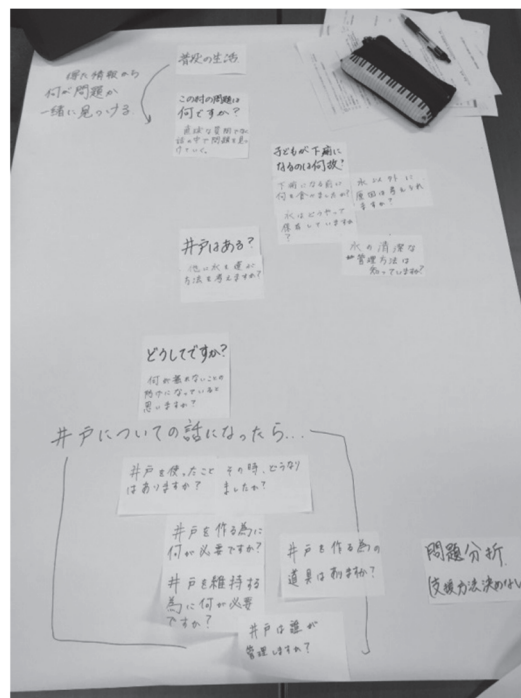
問詞を用いて質問をするようにするのだ。また、質問攻めをし、事情聴取や尋問のようになってはいけない。知りたいことだけを聞き、相手が単調に思ってしまうのはご法度だ。相手の答えに対して、それをちゃんと聞いたうえで、そこに質問をするようにする。あくまでも「対話」を意識して、会話の中で思い出してもらいつつ相手と対等に向き合うのだ。「途上国援助」の場面に限らず、人とコミュニケーションをする際、特にまだ知り合っていない人との関係づくりの時に、実践していきたいと思った。事実質問を使わないとどのような結果が起きるのか、よく考えれば必要性がわかる。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

講義後半のグループワークでは、「ファシリテーションを考えるための事例」を資料に、前半で学んだ事実質問やメタファシリテーションをどのように使い、調査などに生かしていくのかについて、練習をした。私の班は、コミュニケーション能力にあまり自信のない私にとっては運良くも、大学もバラバラ(お茶の水女子大、宇都宮大、奈良女子大)、学年もバラバラの女子学生の集まりとなり、お互いに初対面だったのでかえって話しやすく、意見を言いやすく、また多様な意見が出て、活発な、質の高いグループワークや討論ができたと思う。

グループワークの具体的な内容としては、実際にあった途上国での事例(を多少変えたもの)を見ながら、ある意味で失敗例でもあったその事例について、「ではなぜ失敗になってしまったのか?」「どのようにすればよかったのか?」「私たちなら(今学んだ事実質問などを使って)どう村の人と話し、援助へと繋げていくだろうか?」と話し合った。主人公である私と村人との対話の中で、事実質問とは言えないところ、対話として間違っているところ、「ここをこのように置き換えるべきだ」などと意見を出し合った。

事実質問という考え方に少しずつ馴染んできたころであり、いろいろな意見を出すことができたと思う。6人の意見を出し合ったこともあり、右のような一枚の模造紙にまとめるまでに至った。最後の発表の時間では別の班のまとめた意見も聞くことで、そして講師の方の講評をお聞きすることでまた考えが広がる。



写真：グループワークでまとめた模造紙

国際協力や地域開発活動について考えたこと

最初に「当日の内容は必ずしも国際協力や途上国の話題に限らなかった」と述べたが、それでも国際協力の現場のニーズの把握や援助の在り方への影響を疑似体験し理解することが本講義の主目的である。内容としてはそれを見据えた序章部分的な役割が大きかったような印象であったが、講師の方の経験談も少なからず伺え、国際協力や地域開発活動について考える機会となった。

私はこれまで、JICAや開発途上国援助に取り組む方や企業のお話を伺う機会が何度かあった。実際に現地に出向いた際、現地に滞在し援助に取り組んでいる方のお話などから、日本の援助の様子を目からも耳からも知った。本講義の講師の方のように、実際に現地での経験がある方のお話は、深い。

グローバル化も進む中、自らが現地滞在するにしろ、そうでないにしろ、国際協力や地域開発活動の形は様々あると思う。何らかの形で携わっていきたくと改めて思った。それと同時に、真のニーズの把握や、課題の見出し方というものも意識しなければ、と強く思った。本人の思う問題点と私の思う問題点はズレることがある。理解の共有の欠如であり、問題を共に発見することができていないことが問題なのだ。私の思い込みが入っているかもしれない。課題発見はあくまでも相手もしくは共同ですることとし、そのようにズレたときは対話をさらに続けていくべきであろう。そして、個人的な理想は、援助する立場というよりは、共に生きるパートナーとなることだ。

今後の学習や研究に向けた抱負

異なる文化・環境で生きてきた方々と接するとき、そこには少なからず多少の障害や困難が生じて来る。私自身最近、異文化の方と接していて、そのように感じるものが強くあった。特に日本はそのような困難が多いという意見も耳にした。今後ますますグローバル化が進み、ダイバーシティという言葉が叫ばれている中、この問題は無視できるものではないと考え、今研究を進めている。私の専門は社会心理学であり、研究の一環で、一対一で面接(インタビュー)をすることもある。インタビューはあらかじめ決めておいた質問をするが、それだけでなく会話の流れに応じて柔軟に質問の変更や追加をおこない、自由な反応を引き出す、半構造化面接法を用いる。本人にもすぐには気づけなかった考えを聞くために、一方的にならない対話のコミュニケーションを目指していきたいと思っている。

この度学んだ対話法や接し方、知識は本講義の目的の分野でももちろん、幅広い分野で活用できる。「ムラのミライ」のHPなどを参考にしつつ、対話型ファシリテーションを用いた実践的な手法を身に着け当事者主体の参加型開発について考えていきたい。

3. 講師報告書

研修報告書

1. 研修対象： お茶の水女子大学グローバル協力センター大学間連携イベント
 2. 研修項目： 『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方」
 3. 研修期間： 2017年7月22日（土）10：00～17：00
 4. 研修講師： 前川 香子
 5. 研修開催場所：お茶の水女子大学大学本館 135 室
-

研修概要（実施方法等）

【午前】

1. 自己紹介および当会の過去の活動紹介（主に失敗例）
2. メタファシリテーションの基本的な考え方について
3. メタファシリテーションの基礎となる事実質問について
4. ペアでの練習（「相手の事を知る」ための事実質問）

【午後】

5. メタファシリテーションを用いたケーススタディ
6. グループワーク（失敗事例を用いて何が問題だったのかを考える）
7. ペアでの練習（「改めたい習慣」の解決策に気付いてもらうための事実質問）

講師から一方的に説明するだけでなく、学生たちの経験や知っていることを常に聞き出し、そうした事例を基にして、メタファシリテーションの使い方や考え方を学べるような講義スタイルを用いた。

・所感

学部1年生から修士課程の学生まで、知識や経験に幅があるものの、ほぼ全員が最後まで真剣に講義に参加できていたと見受けられる。特に遠方の大学からの聴講生は、より積極的に発言し、議論に参加していた。

取り上げる事例や練習のテーマを、今後調査に行く学生たちのトピックを使ってみると、より面白いワークになったかもしれない。

また、今回のプログラムが目的としていた他大学・学生たちの間での交流も考えると、グループ分けをする時に、各グループにそれぞれの大学から最低1名は入っているように配慮しても良かったかもしれないと考える。

4. 資料

(1) 参加者アンケート集計結果

イベント終了後、参加学生を対象にイベント参加経緯と満足度等についてアンケートを配布し集計を行った。

全学共通科目「国際共生社会論実習」の履修者には本イベントの参加が推奨されていたため、「本イベントを知った経緯」として、指導教員やその他（国際共生社会論実習の授業の一環として参加）、またポスター/チラシ等の掲示が多かった。

「内容全般」については回答者 28 人中 26 人が満足、2 人がやや満足と回答しており、非常に満足度の高いイベントであったと言える。

「開催時期と期間」については 5 人が満足、12 人がやや満足、10 人がやや不満足、1 人が不満足との回答があった。不満足の理由として、テスト期間やサマープログラムと重複してしまったことと、時間が長かったこと等へのコメントがあった。

「テーマの選択」については、25 人が満足、3 人がやや満足、「内容のわかり易さ」については、24 人が満足、4 人がやや満足で、今回のテーマの関心の高さと内容についてほぼ全員が満足している。また、記述部分から「ファシリテーションとはどういうものなのか、曖昧なままの参加だったが、この先のフィールド調査について自分が何を準備すればよいのか明確になった。」「3つのワークはわかり易く、ヒアリングの技術を体験できた。対話の始め方、初対面の人が答えやすく話したくなるような質問の出し方＝事実質問を調査地で是非使おうと思います。」などのコメントがあり、多くの参加者が今後の活動に活かせると考えていると言える。

本イベントを何で知りましたか（複数回答）	計
ポスター／チラシ等の掲示	10
大学ホームページ、Facebook、Twitter、Ochamail	1
「共に生きる」スタディグループのメーリングリスト	4
指導教員の紹介	8
その他（国際共生社会論実習の授業の一環として参加）	7

本イベントの感想（時期と期間）	計
満足／適当	5
やや満足／適当	12
やや不満足／不適当	10
不満足／不適当	1

本イベントの感想（会場）	計
満足／適当	24
やや満足／適当	3
やや不満足／不適當	1
不満足／不適當	0

本イベントの感想（テーマの選択）	計
満足／適当	25
やや満足／適当	3
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

本イベントの感想（内容のわかり易さ）	計
満足／適当	24
やや満足／適当	4
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

本イベントの感想（内容全般について）	計
満足／適当	26
やや満足／適当	2
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

その他（感想）
<p>ファシリテーションとはどういうものなのか、曖昧なままの参加だったが、この先のフィールド調査について自分が何を準備すればよいのか明確になった。</p>
<p>3つのワークはわかり易く、ヒアリングの技術を体験できた。身につけるにはかなりトレーニングが必要だが、その点も具体的なアドバイスがあって良かった。対話の始め方が特に役立った。初対面の人が答えやすく、話したくなるような質問の出し方（事実質問）を調査で是非使おうと思います。</p>
<p>事実質問を聞くことで、相手の本音を聞けるということで、普段の生活でも実践して行きたい。また、悩みを聞く時は、相手の現状を聞く、過去の経験を聞いていくということになるほどと思った。</p>

<p>自分にとって慣れない思考の限界を超えようと7時間奮闘したことがとても良い時間となった。事実質問とすぐに提案しようとする努力という内容が特に役立った。</p>
<p>ファシリテーションの概念が変わった。「事実質問」という考えが新鮮だった。解決策を途上国の人々自身で考えさせるという話が特に役立った。ただ、途上国の人々が考えた案より先進国の人の考え方が良かった場合の線引きはどうすれば良いかなどもう少し説明が欲しかった。</p>
<p>初めてこのようなワークショップに参加したが、様々な学生と交流でき良い刺激となった。「事実質問」について初めて知った。質問の聞き方がこんなにもその後に影響するのは今まで思ったこともなかったので今後意識していきたい。</p>
<p>対話を用いて相手の事実を引き出すことの難しさに気付きました。</p>
<p>受講者同志で対話をするワークショップが多く、習った傍から実践に活かすことが出来てよかった。聞き出す際に疑問詞に気をつけることで、より客観的な現状把握ができるということが特に役立った。</p>
<p>あっという間に感じられた1日でした。濃厚だったと思います。自分の意見を発見する場が多くありがたかった。事実質問、使ってもいい疑問詞とだめな疑問詞が特に役立った。</p>
<p>実際やってみるとつい“Why”“や”How”がでてきてしまっていることに気付いた。練習を普段から意識して身につくようにしたい。解決策を導き出す方法、事実質問の大切さが特に役立った。</p>
<p>聞き方によって、相手の感情、考え、事実と解答が変化するという事は大きな発見でした。</p>
<p>今後のフィールドワークに活かせる対話のポイントを沢山学ぶことができ、実習で実践出来ればと思う。事実質問の難しさ、自身の発想を押し付けず、相手自身が発見を得られるような働きかけをする難しさを学び、同時に可能性も実感するきっかけになりました。今回学び足りなかった部分を自分なりに調べ直してみようと思います。重要なヒントが得られたように思います。</p>

(2) 写真



講師の前川香子氏



ペアで「事実質問」の実践練習



ケースストーリーを元にグループワーク (1)



ケースストーリーを元にグループワーク (2)



グループ発表の様子 (1)



グループ発表の様子 (2)

「国際協力ボランティアを知ろう」
実施報告書

目次

	ページ
1. 活動の概要	1
(1) 目的	
(2) 概要	
(3) 日程	
(4) 参加者	
(5) 成果	
2. 参加者報告書・訪問記録	7
2-1 参加者報告書	9
2-2 訪問記録	12

1. 活動の概要

1. 活動の概要

(1) 目的

「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創設—女性の役割を見据えた知の交際連携—」事業の一環として、途上国の社会経済開発のために現地の人々とともに活動する国際協力ボランティアの役割や、必要な資質、ボランティアの活動から得られることや日本社会に還元できることについて理解を深める。

(2) 概要

国際協力機構（JICA）二本松青年海外協力隊訓練所の協力を得て、開発途上国でのボランティアの経験者の講演や派遣前の訓練生との交流を通じて、ボランティア派遣の制度や実際、途上国の教育開発や社会開発の実際、ボランティア活動を通じて得られるもの、協力隊後のキャリアなどについて情報を得た。

2日目には、東日本大震災で被災した精神障害者の支援活動を行うNPO「コーヒータイム」を訪問し、支援の実際についてお話を伺った。

(3) 日程

平成30年2月5、6日（1泊2日）

日程		活動
第一日目	午前	東京→二本松青年海外協力隊訓練所（列車）
	午後	二本松青年海外協力隊訓練所見学、講義 「JICA 日本松所長の熱血講座～JICA／ 国際協力ボランティアとは～」 洲崎毅浩所長 「青年海外協力隊活動の実際」 永井涼氏 二本松訓練所業務課（イエメン・青少年活動） 飯部つかさ氏 国内協力員（東ティモール・コミュニティ開発） 星明彦氏 福島県国際協力推進員（セネガル・数学教育） 協力隊経験者、訓練生とのディスカッション、協力隊を題材にした映画「クロスロード」鑑賞
第二日目	午前	派遣前訓練参加
		ふりかえり

		東日本大震災で被災した精神障害者の支援活動を行う NPO「コーヒータイム」訪問・復興住宅訪問
	午後	二本松→東京

(4) 参加者

お茶の水女子大学 文教育学部 人間社会科学科 心理学コース 4年生 1名

引率者 原 智佐特任准教授

*今回は、本学及び他大学の行事と重なり、参加者1名となった。

(5) 成果

1) 二本松青年海外協力隊訓練所

協力隊派遣に際して求められる専門性、協力隊後のキャリアを含め、実際、どのようになっているのかを知り、また、経験者の考え方を伺うことができた。

(協力隊派遣に際して求められる専門性)

協力隊派遣に際してのどのような専門性が求められるのか、農業や保健といったいわゆる途上国で求められる専門ではない場合、協力隊に応募するのは難しいのではないか、という声も聞く。この点について、コミュニティ活動、青少年活動、環境教育、といった、コミュニティを対象とした事業の展開、コミュニティと行政の関係強化を内容とする職種については、農業、保健のような技術的な専門性は求められないこと、地域研究や教育といった専門性が活かせる職種であるとのことであった。

(協力隊後のキャリア)

協力隊後のキャリアは、応募を考える者の大きな関心事項である。この点について、これまでの協力隊員に関するデータに基づく説明があった。

2012年度中に帰国した協力隊員1,032人の進路は、就職61%、現職復帰18%、進学・復学8%、アルバイト・非常勤7%、その他6%、とのことであった。

協力隊員へのニーズは、海外進出企業、また、自治体職員や教員においても、高まっている。自治体職員や教員においては、外国人住民への対応のみならず、多様な地域の課題に取り組む姿勢が求められているとのことであった。

2) NPO 法人・コーヒータイム

同NPO法人は、東日本大震災で被災した精神障害者の支援活動として、作業所の運営、生産品の販売と地域とのネットワークのための店舗兼喫茶店の運営を行う。

今回、当事者の方からお話を伺うことができた。「当事者研究」という、当事者同士が精神疾患についての経験や対応を共有する活動を通じて、疾患を抱えつつも、対処できるようになったとのことであった。

以上

2. 参加者報告書

- ・ 訪問記録

2-1 参加者報告書

三上奈緒子

お茶の水女子大学 文教育学部 人間社会科学科 心理学コース 4年

・JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

青年海外協力隊は、現職を休職または退職した後に 2 年間という期限付きで途上国に派遣される制度であるため、任期終了後のキャリアに不安はないのか、協力隊の活動を通してどのような将来を思い描いているのか、という点に疑問を抱いていた。今回の訪問では、協力隊経験者で現在は JICA 国内協力員として勤務している方々や協力隊候補生の方々からお話を伺うことができ、自身の疑問に対する示唆を得ることができた。全ての方に共通していたように思えることは、協力隊の任期終了後の行く末に多少の不安はあるものの、過度に不安になりすぎずに前向きに協力隊という貴重な機会に対して全力で挑戦する、ということであった。度重なる選考を経て協力隊として活動する権利を得ることができたからには、その機会を開発途上国の人々のために、また自分自身のためにも存分に活かす、という心持ちで取り組むことが大切だと学んだ。

その他にも印象に残った点はたくさんある。一つが、協力隊経験者の方のお話の中で、現地で活動をするときに現地の要望ベースで進めていくのか、または自身の提案や経験ベースで進めていくのか悩んだということである。今回、洲崎所長のお話を伺い知ったことであるが、協力隊の活動要請内容は事前に定められているものの、実際に現地で求められることは違っている場合や、現地に行ったら当該プロジェクトは終わっていたという場合もあるという。そのため、このような状況にある協力隊員はどのような活動を行うのかを決めなくてはならず、現地の要望や自分自身の課題意識や調査を基にやることを決めるプロセスが必要だということ。この点を伺い、協力隊は想像以上に業務の企画力や提案力が求められる仕事なのだということを実感した。また、前述したように要望ベースと提案・経験ベースの折り合いをつけるのも非常に難しいと感じた。

また、ある協力隊経験者が子どもの虐待に関する啓発プログラムを企画し、現地の人々に研修を行った際のアンケート実施の手法も深く印象に残った。前提として、当協力隊員の派遣国では虐待が虐待として認知されておらず、虐待の正しい理解を促進する必要があった。そのため現地の人向けに虐待に関する研修を実施した。研修の終了後に、研修の充実度や満足度を問うアンケートを実施したいところであったが、5 件法で問うような一般的なアンケートではシャイな国民性である現地人は遠慮をして正しく回答しない可能性があり、現地の意向を正しく汲み取ることができない恐れがあった。そこで、研修の前後で虐待の用語に関する簡易的なテストを実施し、そのテストの結果を研修の充実度や習熟度の指標としたという。これは現地の人々の特性を知っているからこそできる技であり、このような小さな工夫が現地を正しく理解する手助けになるのだと感じた。

他にも別の協力隊経験者による、相手を知り文化の違いを受け入れるためにまずは形から自分が受け入れるというお話も印象的であった。具体的には一緒にお祈りをしたり、同じ服装を纏ったり、お茶の入れ方を習ったりという行動である。異文化交流は新しい知見に触れることができ楽しい反面、知らないうちに禁忌に触れてしまうのではないかとという難しい側面もあると感じていたため、純粹に同じ行動を形から受け入れるというのは印象的であった。

・NPO 法人コーヒータイトム訪問を通じて感じたこと・印象に残ったこと

NPO 法人コーヒータイトムの利用者の「当事者研究」に関するお話が印象的だった。当事者研究とは精神疾患をもつ人同士が集まり、疾患の症状や困っていることをそれぞれ共有し、対策を考える集会のことである。おそらく、集団で行う認知行動療法に近いものだと推測できる。この利用者は、この集会を通して幻聴との向き合い方が変わり、幻聴がなくなってもいいや、という気持ちになったという。また、幻聴の性質そのものも変わり、自分を否定するものや攻撃的なものから自分を労わるものに変化したという。これまで、認知行動療法は様々な精神疾患に効果があることが科学的に実証されているものの、個人が長年かけて作った認知の偏りを修正する必要があるため、治療回数を重ねる必要があり根気よく取り組まなければならないという印象を持っていた。しかし、実際に認知行動療法を用いて大幅に症状が改善した当事者の方の様子を伺うことができ、療法の効果を確認する示唆に富んだ機会になった。

また、復興公営住宅の見学も新たな気づきを得る機会となった。訪れた公営住宅は新築で周囲の環境も整えられており、申し分ない居住環境のように見えたが、住民に話を伺うと様々な問題を抱えていることが分かった。その中で、住民間の交流という観点からは仮設住宅に居住時の方が活発で良かったというお話が印象的だった。仮設住宅時は窓から顔を出せば隣人の顔が見え、仮設住宅周辺でも住民とすれ違う機会が多かったという。それまで仮設住宅は劣悪な居住環境とばかり思い込んでいたが、このような観点は実際の生活者の意見を聞かなければ分からないことであった。現在の復興公営住宅は住民間の交流の少なさが一つの課題だと伺ったが、住居等のインフラが整うだけでなく、震災前と同様の質の生活が確保されてこそ本当の復興だと言えるのではないかと感じた。

・国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと

国際協力というと政府開発援助(ODA)の印象が強いが、それ以外にも様々な組織や機関、市民がかかわり直接的または間接的に国際協力を担っている。また、仕事として国際協力に従事する立場もマネジメント系のものからスペシャリスト系のものまで様々である。そんな中、青年海外協力隊はスペシャリストの中でも最も深く現場を知ることができる立場なのではないかと考えた。その理由は、現地のカウンターパートとともに二人三脚で活動に励むのはもちろん、現地の一般家庭でのホームステイを通して寝食を共にする経験も積

むことができるためである。もちろん協力隊の現地での居住形態は派遣先により様々であり、ホームステイのような形態をとらない場合もある。ただし、一定数の協力隊が経験するであろう寝食を共にする経験は意識せずとも現場感覚を養うことができる絶好の機会だと思う。また、現場に精通しており現地の人のがんこちが分かるということは、メーカーの製造現場や政策立案など、国際協力に限らずどのような分野であっても重要な原則だと思う。そのためこの観点に基づけば、協力隊で培った現場感覚や現場を重要視する姿勢は、ほかの様々な仕事に応用でき、協力隊終了後のキャリアも自然と開けてくるのだろうと考えた。

被災地支援ボランティアは、被支援者である現地の人を聞き、要望に沿った支援を提供するべきであるという点で、本質的には国際協力と同様の原理で成り立っているのではないかと考えた。この考えは、復興公営住宅で住民の方のお話を聞く中でより強固なものにすることができた。お話を通して、現地の人を聞きには日頃から深いコミュニケーションをとり信頼関係を築く必要があると感じた。また、現地の人を要望はただ受け入れるだけでなく、実現不可能なものに対しては不可能である由を説明することや要望の優先順位付けを行うことが不可欠だと感じた。そのためには現地の人と親密なコミュニケーションを実施しつつも第三者の客観的な視点も持ち合わせていることが重要だと思った。

・今後の学習や研究に向けた抱負

本プログラムに参加する前から、職務の専門性を培って国際的に活躍したいという思いを持っていたが、青年海外協力隊経験者や候補生の方々のお話を伺う中でその思いをより強くすることができた。私自身は職務上有効な専門資格や専門性は備えていないが、これから就業予定の民間企業で自分の専門分野を見つけ、高めていければと思う。また、NPO法人コーヒータイムの活動も心理学専攻である自身にとって大変興味深く、これから専攻分野の学習も意欲的に取り組んでいきたいと思った。



訓練所職員によるプレゼンテーション



訓練生向けの講義

2-2 訪問記録

訪問先：二本松青年海外協力隊訓練所

日時：2018年2月5日

面会者：二本松青年海外協力隊訓練所 洲崎毅浩氏（所長）、坂元拓馬氏（国内協力員）
報告者については以下参照。

今回の二本松青年海外協力隊訓練所訪問では、以下の方々にお話を伺った。また、機会を捉え、候補生の方々ともお話しすることができた。

洲崎毅浩氏 二本松青年海外協力隊訓練所 所長

「JICA 二本松所長の熱血講座～JICA／国際協力ボランティアとは」

永井涼氏 二本松訓練所業務課（イエメン・青少年活動）

飯部つかさ氏 国内協力員（東ティモール・コミュニティ開発）

星明彦氏 福島県国際協力推進員（セネガル・数学教育）

「青年海外協力隊活動の実際」

坂元拓馬氏（国内協力員）には、全工程を通じてお世話になり、また、関連する様々な情報を提供いただいた。

以下では、伺ったお話しに基づき、今回の関心事項であった、ボランティア派遣に際して求められる専門性、着任後の活動の展開の仕方、協力隊後のキャリア、を中心に報告する。

○JICA ボランティア事業の目的

JICA ボランティア事業の目的として、以下が掲げられている。

- ① 途上国の経済・社会の発展、復興への寄与
- ② 有効親善・相互理解の深化
- ③ 国際的視野の涵養とボランティア経験の社会還元

このような考え方を踏まえ、要請内容においても、途上国の人に技術を教えることだけでなく、相互理解やボランティア経験を通じた日本の青年の成長といった面も重視されている。

○ボランティア派遣に際して求められる専門性

青年海外協力隊に関心があるが、農業、保健等の途上国で必要とされていると考えられる技術分野を専攻した学生、あるいは、小学校教員等の資格を有する学生でないと、協力隊に参加するのは難しいのではないかと、という話をしばしば耳にする。

今回、この点について、実際の要請内容に照らして話を伺った。「要請集」を見ると、「職種」として、もちろん、こうした技術や資格を有する募集内容もあるが、技術や資格を必要としないものも少なくない。代表的なものとしては、コミュニティ開発、青少年活動、環境教育、がある。それ以外の職種であっても、専門的な技術を必要としないもの、国内でのボランティア経験を評価するもの等もあるので、個別の要請内容を詳細に見る必要がある。

「コミュニティ開発」については、要請数が多い。また、要請内容は、女性グループ支援、障害者支援、地域の特産品のプロモーション、生計向上、地方自治体とコミュニティの関係強化等、多岐にわたる。また、「JICA ボランティアウェブサイト」では、現地で作成された「要望調査票」を閲覧することができ、現地で何が課題とされているのか、どのような取り組みが求められているのか、といった活動をイメージするのに有用な情報も入手できる。

これらの要請において、技術や資格を必要としない、ということが、「大学の勉強はボランティアに関係ない」ということではない。地域の状況を理解し、活動について考える上で、教育学、社会学、心理学をはじめとする大学での専攻は、有用である。これまで勉強してきたことが、ボランティア活動にどう役立つのか、途上国や関連するセクターの情報を収集し、自分なりに考え方を整理しておくことも重要である。このことは、任地に到着して、自分の活動について考える際も、手放しで考えるのではなく、自分はどうのような切り口から、この課題に取り組むのかを考えるのに役立つ。

○着任後の活動の展開の仕方

上記のような要望に基づいて協力隊員として派遣されるが、必ずしも要望内容そのままの活動を行える訳ではない。派遣後、まず取り組むべきことは、何が派遣先の課題であるのかについて、しっかり自分の目と足で見て回ることである。要請内容には、活動の内容は書いてあっても、なぜそのような活動が必要なのか、活動に際しての障害は何なのか、といった活動の背景や全体像について十分記載されているとは限らない。活動を検討するに際して、行政の予算不足や人材不足、行政のコミュニティの関係といった側面が重要になる。また、統計データも未整備である場合が少なくなく、自分の足で情報を得ていく必要がある。こうした派遣先の課題とその全体像を理解するのに、多くの隊員は数か月から1年をかけている。配属先に前任の隊員がいて、その交替である場合、ある程度情報も収集され、活動内容も定まっていることもあるが、新規の派遣である場合は、情報収集と現状の理解をしっかり行う必要がある。

その上で、自身の能力や関心を踏まえ、どのような貢献ができるのかをカウンターパートと議論していくことになる。ここで、活動内容を積極的に提案していく「提案型」で行くのか、カウンターパートからの要望に応える「要望対応型」で行くのかは、自身の能力や関心、カウンターパートとの関係、派遣直後であるか、一定期間経過していか、等によっても異なってくる。派遣当初は「要望対応型」で活動していたが、1年を過ぎ、派遣先の状況がわかってきてからは、「提案型」で活動したという隊員もいる。

また、これはボランティア活動に限らず、どのような仕事についてもいえることだが、「これをやればうまくいく」という「答え」ことはなく、同じ分野で活動する隊員の取り組みを参考にしたり、新しい情報を収集したりすることも必要である。

○協力隊後のキャリア

帰国したボランティアのキャリアは多様である。(表 1.)

表 1. 2012 年度中に帰国した青年海外協力隊員・日系社会青年ボランティア 1,309 人のうち、回答があった 1,032 人の進路

進路	人数	%
就職	631 人	61.1%
現職参加復職	182 人	17.6%
進学・復学	81 人	7.8%
アルバイト・非常勤	73 人	7.1%
その他	65 人	6.3%

(出所：JICA・クロスロード (2014 年 12 月) p.9)

また、就職した 631 人の就職先内訳は表 2. の通りである。

表 2. 2012 年度中に帰国した青年海外協力隊員・日系社会青年ボランティア 1,032 人のうち、就職した 631 人の就職先内訳 (%)

就職先内訳	%
民間企業	41.8%
公益法人	16.5%
地方公務員 (教育職)	12.5%
地方公務員 (一般職)	7.8%
国家公務員	7.1%
JICA 関係	4.9%
自営・企業	4.8%
NGO・NPO	3.5%

その他	1.1%
-----	------

(出所：JICA・クロスロード (2014年12月) p.9)

JICAでは、帰国した隊員の就職の支援を行っているが、海外に進出している民間企業からのニーズをはじめとして、帰国隊員へのニーズは増加している。

地方公務員（一般職、教育職）においても、外国人住民への対応といったことから、多様な地域の課題に取り組む姿勢への期待まで、帰国隊員への期待は高い。採用に際して、特別枠を設けたり、ボランティア経験を職務経験として評価する自治体もある。(JICA・クロスロード (2014年12月) p.21)

また、民間企業、地方公務員（一般職、教育職）については、「現職派遣制度」があり、この対象となっている企業等の場合、退職せず、職についてそのまま派遣されることが可能である。民間企業の場合、2,000以上の企業で現職での派遣の実績がある。

(https://www.jica.go.jp/volunteer/application/seinen/support_system/incumbent_participation/index.html)

途上国で様々な課題にチャレンジした経験を活かして、途上国、あるいは国内の様々な課題に取り組むNGOで活動したり、起業する者もいる。これらは、特徴ある帰国隊員の進路と言える。

また、途上国でのボランティア経験を踏まえ、国内、海外の大学院へ進学する者も少なくない。こうした中には、専門分野の知識を高めて、JICAの企画調査員や専門家となったり、国際機関で職を得る者もいる。こうしたキャリアについては、特定のパスがある訳ではないことから、訓練所や協力隊事務局に経験者を紹介してもらい、求められる能力やキャリアの開拓の仕方等について、個別に話を聞くことも有効である。

もちろん、途上国や国際協力と全く関係のない職業に就く者もいる。

帰国後の進路について、決まった道筋はないし、これまでの帰国隊員の進路も多様である。将来については、自信の専門性や関心、将来何をやりたいのか、といったことを考え、関連する情報を収集していくことで、将来についてのビジョンが形成されていくと言える。

帰国後の進路に関する情報は、以下でも入手可能。

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/index.html

文責：原 智佐

訪問先名：NPO 法人コーヒータイム

日時：2018年2月6日 10:30～14:30

面会者：橋本由利子氏（NPO 法人コーヒータイム理事長）

内容：

今回はまず、NPO 法人コーヒータイムの利用者の方からお話を伺い、続いて復興公営住宅の見学、最後に NPO 法人コーヒータイムの作業場の見学を行った。

○NPO 法人コーヒータイム利用者のお話

まず、利用者の一人から「ひなんして変わったこと」という題目でプレゼンを伺った。この方は東日本大震災及び原発事故を機に浪江町から二本松市に移動してきた利用者の一人である。「ひなんして変わったこと」は3つあるという。1点目は幻聴との付き合い方が変わったことである。避難前は過激だった幻聴が避難後は自分を労わるような言葉をかけるようになったという。その背景には震災後から本格的に「当事者研究」に取り組んだことが挙げられる。当事者研究とは精神疾患をもつ人同士が集まり、疾患の症状や困っていることをそれぞれ共有し、対策を考える集会のことである。この集会を通して幻聴との向き合い方や幻聴そのものの性質が変わったという。2点目は一人暮らしが楽になったことである。避難前は一人暮らしに緊張感を感じていたというが、月に1回一人暮らし友の会の仲間と交流する等を通して一人暮らしを楽しむことができるようになったという。3点目はコーヒータイムが生きがいになったことである。震災を機にコーヒータイムの事務所が浪江町から二本松市に移転し、浪江町時代には在籍していなかった新たな利用者との出会いがあったことから、震災がなければ会わなかった仲間と出会えたことを生きがいの一つとして挙げている。そして、将来の夢として、コーヒータイムの「ぬし」になることと語って下さった。「ぬし」とは、組織を統括する「リーダー」とは違い、普段は沼の底に沈んでいるもののいざという時に昇ってくる存在だという。この方はコーヒータイムでの接客や商品準備以外にもコーヒータイムの広報として日本各地でのイベント参加等も担っており精力的に活動している。コーヒータイムの利用により心身ともに良い方向へ変わった様子を伺うことができた。

○復興公営住宅の見学

続いて二本松市にある浪江町からの避難者の復興公営住宅を訪問した。この団地には300人ほどが居住している。今回は、団地の交流場である集会場を見学させていただいた。

集会場の見学及び住民の方のお話からは、新築の団地という一見快適な居住環境にいる人々の生活の実態を垣間見ることができた。その中で伺った問題点をいくつか紹介する。1点目は、集会場の収容能力が低く全住民が集まる場として機能していない点である。300人ほどが居住しているにも関わらず集会場の収容能力は最大20人ほどである。そのため、全住民が集まる機会を儲けようにも物理的に難しい現状にある。2点目は、1点目とも関連

するが、イベント開催時に集客が上手くいかず住民間の交流が少ない点である。当団地では毎週末、外部の協力を得てそば打ち等のイベントを開催している。イベントの周知が上手くいっていないのか、住民がイベントに参加する意欲が乏しいのか、会場の収容能力が問題であるのか、原因は定かではないが、参加者は毎回 10 人程度であるという。ただ、当団地に移動する前の仮設住宅に居住時の方が住民間の交流が活発であったというお話から、団地の建築設計が住民間の交流を妨げる造りであることが原因である可能性が大きい。3 点目は、震災により生活が一変したという点である。職を失い新しい職を見つけることができない人や、ちょっとした物音に対して敏感になり不眠状態が続く人など、未だに不安を抱えている人も多い。物質的には充足しているように見えても、様々な問題を抱えている様子を垣間見ることができた。

○NPO 法人コーヒータイムの作業所の見学

最後に NPO 法人コーヒータイムの作業所を見学した。NPO 法人コーヒータイムには接客と商品準備という 2 種類の就労内容があるが、当作業所には後者の商品準備を行う利用者の方が在籍している。商品準備は主にボールペンの糸巻き作業や古くなった布を細かく裂いて麻糸などとともに織り上げた再生衣料である咲きおりの製作である。ボールペンは企業からの発注もあり月に数百本単位で製作することもあるという。ボールペンに巻かれている糸の色の種類は 30 種類も存在するが、利用者の方は 30 種類全てのパターンを暗記しており、手早く要請に応じて製作することができる。

作業所の位置は店舗がある駅前からやや離れており、自動車で移動する必要がある。作業所の内部は木目調で採光が良く温かみを感じられる空間であった。キッチンとソファが併設されており、常にリラックスした状態で作業ができるように配慮されているように感じた。

文責：三上奈緒子

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

大学間連携イベント『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方
「国際協力ボランティアを知ろう」実施報告書

2018年3月

お茶の水女子大学グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel/Fax: 03-5978-5546

Email: info-cwed@cc.ocha.ac.jp

